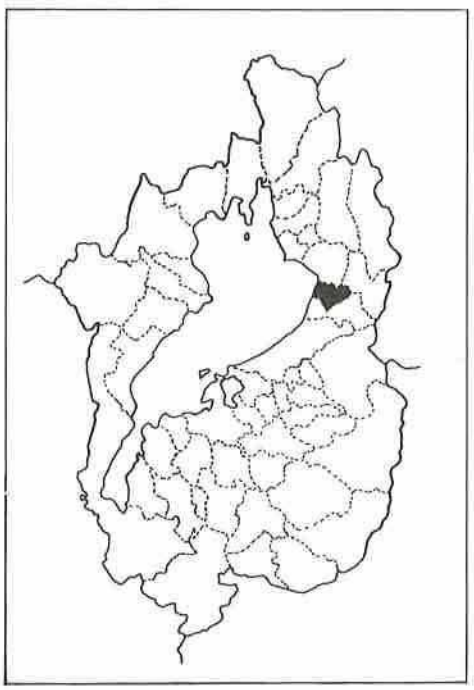
近江町文化財調査報告 1

近　江　町　内
遺跡分布調査報告書



1 9 8 7. 3

近江町教育委員会

序

滋賀県坂田郡近江町は、琵琶湖の北東岸天野川の下流地域に位置する町です。この近江町は、古代息長(おきなが)氏の本拠地として、広く全国に知られています。また、秀麗な朝妻山や天野川が作った沖積平野などに囲まれた、緑豊かな町でもあります。

近年、圃(ほ)場整備や各種開発・土木工事が盛んになり、地下に深く眠る埋蔵文化財も破壊される危険に瀕するようになりました。

そこで本町教育委員会では、これらの開発から埋蔵文化財を保護するために、昭和60年度から2ヶ年計画で国・県の補助をうけ、町内遺跡の分布調査を実施しました。本書は、その成果をまとめたものです。

本報告書が、埋蔵文化財の現時点における基礎資料として、遺跡保護のため活用されるよう希望致します。

最後に、調査に当ってご協力いただいた関係者の方々に、深く感謝致します。

昭和62年3月

近江町教育委員会
教育長　木田源三郎

例　　言

1．本書は、昭和60・61年度の２ヶ年で実施した、近江町内遺跡分布調査の報告である。

2．調査は、総事業費3,000,000円の内、国庫補助金1,500,000円、県費補助金750,000円を受けて実施した。

3．調査は、滋賀県教育委員会の指導を受け、近江町教育委員会が実施した。

4．調査の体制は次の通りである。

近江町教育委員会	教育長	木田源三郎
	教育次長	土川　恵章
	社会教育係長	世森　増信
	技師	中川　通士

5．本書は中川が執筆し、付論として粕渕貢・泉朝美・佐藤宗男・大澤正己の各氏から論稿を戴いた。

6．調査には、近江町文化財専門委員中村林一・宇野茂樹、滋賀大学教授小笠原好彦、県教育委員会考古員丸山竜平、近江町史編纂事務局長古野四郎、城郭研究家長谷川銀蔵の各氏からは有益な指導、助言を得た。

7．本書に使用した地図は、近江町発行の2,500分の１を縮少して使用している。

8．本書は、昭和60・61年度の２ヶ年の間に、主に地表観察で確認した遺跡を掲載したものである。今後、新たに遺跡が発見されたり、発掘調査等により遺跡の範囲の変更が起こり得ることを附記しておく。

9．本書には、参考のため中主町教育委員会辻広志氏による山津照神社古墳の出土遺物実測図をトレースし、掲載させていただいた。

10．現地調査にあたって下記の方々のご協力を得た。芳名を記して感謝の微意にかえたい。

泉　朝美	遠藤　秀康	粕渕　辰次	粕渕紀代子	粕渕　早苗	川崎　捨雄
川森　茂子	北居　章三	北川　重雄	佐藤　宗男	島田　一男	高居　芳美
田中　善吾	田中　養次	豊田しづか	中川美野子	中嶋　一人	長野　忠義
中村　了祐	成宮　丈雄	長谷川銀蔵	藤田仙之丈	古野　四郎	松原　義昭
三田村貴子	村岡　勝次	依藤昭之助			

（敬称略）

目　次

序
例　言
第１章　近江町の位置と環境 ……1
第２章　調査の経過……2
第３章　各遺跡の概要……2
醒井神籠石様列石……2
山津照神社古墳……3
宮ノ前遺跡・宮ノ前北遺跡……4
能登瀬遺跡……5
奥深古墳群……5
百如庵遺跡……5
大林寺遺跡……6
定納古墳群……6
寺倉遺跡……6
地頭山城跡……6
塚の越古墳……7
新庄遺跡……7
誓願寺遺跡……8
埋塚遺跡……8
西円寺遺跡……8
太尾山城跡……8
岩脇遺跡……9
舟崎遺跡……10
法勝寺遺跡……10
狐塚遺跡……11
高溝遺跡……12
顔戸遺跡……12
安養寺遺跡……13
日撫山古墳……14
人塚山古墳……14
亀塚古墳……14
笹塚・鳴子塚古墳……14
顔戸山砦遺跡……14
田中屋敷遺跡……15
長沢関跡……15
土川湖底遺跡……15
五反田遺跡……15
飯村廃寺遺跡群……16
黒田遺跡……17
世継遺跡……17
第４章　まとめ ……18
1　旧石器時代……19
2　縄文時代……19
3　弥生時代……19
4　古墳時代……19
5　白鳳・奈良～平安時代……22
6　中世以降……22
7　遺跡一覧……23
付論１　坂田郡近江町顔戸日撫山古墳測量調査報告……25
付論２　法勝寺遺跡出土の古瓦について ……27
付論３　能登瀬遺跡採取鉄滓の金属学的調査……30

挿図目次

第１図　近江町地形図……1
第２図　醒井神籠石様列石位置図……2
第３図　山津照神社古墳及び周辺の遺跡　……3
第４図　山津照神社古墳出土須恵器坏身坏蓋実測図‥3
第５図　山津照神社古墳墳丘図……4
第６図　奥深古墳群及び周辺の遺跡位置図…5
第７図　定納古墳群及び周辺の遺跡位置図…6
第８図　地頭山城跡主要部概要図……6
第９図　地頭山城跡及び周辺の遺跡位置図…7
第10図　塚の越古墳及び周辺の遺跡位置図…7
第11図　誓願寺・埋塚遺跡位置図……8
第12図　西円寺遺跡位置図……8
第13図　太尾山城跡位置図……9
第14図　太尾山城跡俯瞰図……9
第15図　岩脇遺跡位置図……9
第16図　舟崎遺跡位置図……10
第17図　法勝寺遺跡位置図……10
第18図　法勝寺遺跡出土縄文土器……11
第19図　狐塚遺跡出土石棒・王砥石実測図　……12
第20図　高溝遺跡位置図……12
第21図　顔戸遺跡位置図……13
第22図　安養寺遺跡位置図……13
第23図　安養寺遺跡石斧実測図……13
第24図　日撫山古墳及び周辺の古墳位置図　……14
第25図　人塚山古墳位置図……14
第26図　人塚山古墳出土須恵器実測図……14
第27図　長沢関跡位置図……15
第28図　土川湖底遺跡位置図……15
第29図　土川湖底遺跡出土須恵器甕実測図……15
第30図　五反田遺跡出土弥生土器壺実測図　……15
第31図　五反田遺跡位置図……16
第32図　飯村廃寺遺跡群位置図……16
第33図　黒田遺跡位置図……17
第34図　黒田遺跡出土遺物実測図……17
第35図　世継遺跡位置図……17
第36図　世継遺跡出土遺物実測図……17
第37図　近江町内遺跡変遷図(1)……19
第38図　近江町内遺跡変遷図(2)……20
第39図　近江町内遺跡分布図……24・25

写真目次

写真１　安養寺遺跡石斧出土状況……13
写真２　正恩寺遺跡出土軒丸瓦……16
写真３　狐塚遺跡帆立貝式古墳出土家形埴輪　…18

図　版　目　次

図版 1　近江町遠景　東部（岩脇山より）
西部（日撫山より）
図版 2　分布調査風景　表面採集
遺物整理
図版 3　醒井神籠石様列石　遠景（西より）
南峰（東より）
図版 4　醒井神籠石様列石　中峰南部（南西より）
中峰南部南東隅石積
図版 5　山津照神社古墳（東より）
奥深古墳 2 号墳
図版 6　宮ノ前遺跡（東より）
宮ノ前北遺跡（南より）
図版 7　塚の越古墳（東より）
神郷・勝正寺遺跡（南西より）
図版 8　法勝寺遺跡　全景（南西より）
礎石（油壺神社）
図版 9　人塚山古墳（東より）
人塚山古墳（北西より）
図版10　正恩寺遺跡（南東より）
法勝寺遺跡出土縄文土器
図版11　狐塚遺跡石棒（側面）
狐塚遺跡玉砥石
五反田遺跡弥生土器壺
安養寺遺跡石斧
世継遺跡古式土師器甕
図版12　顔戸遺跡出土遺物実測図
辻の前遺跡出土遺物実測図
図版13　山津照神社古墳出土遺物実測図

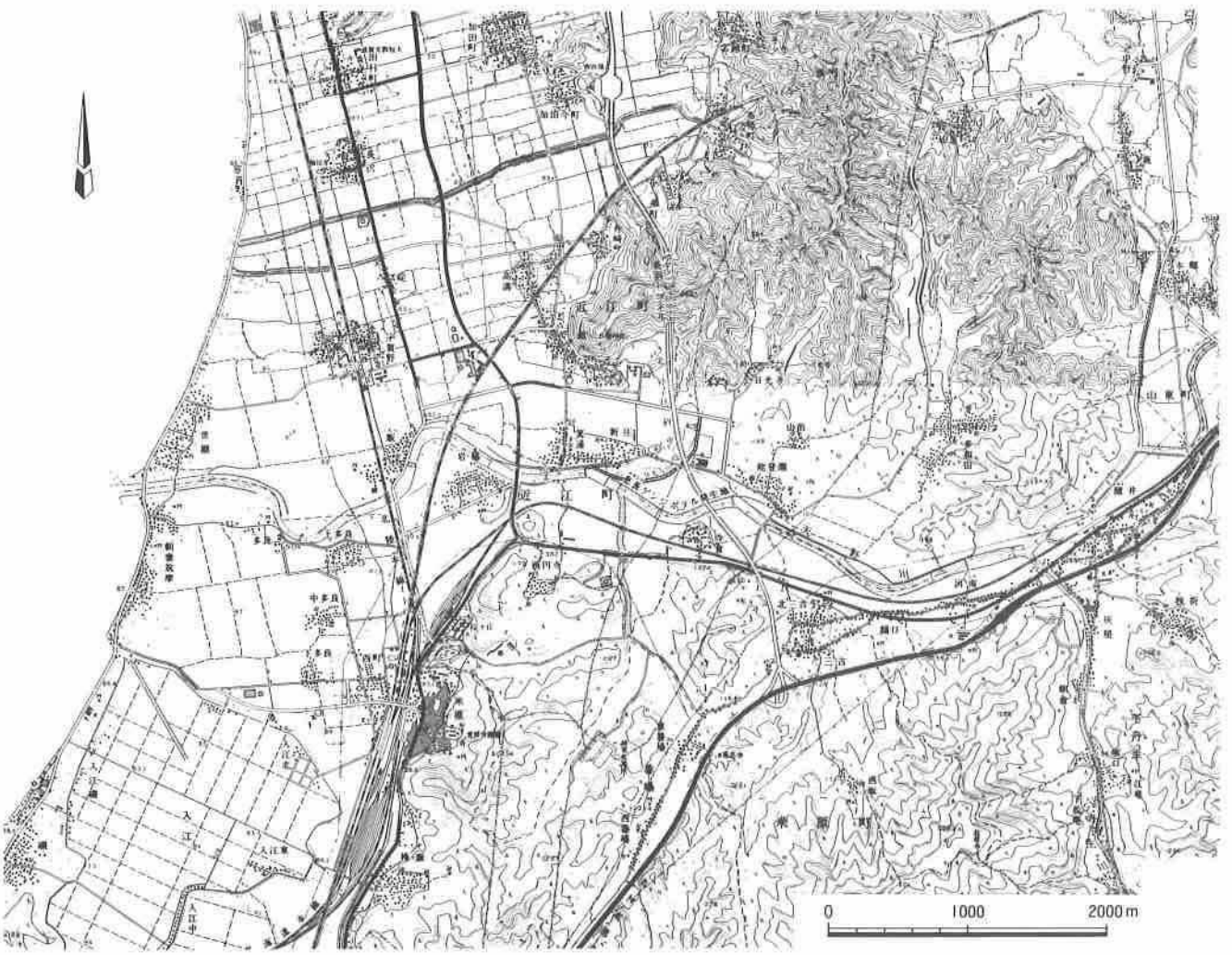
第1章　近江町の位置と環境

滋賀県坂田郡近江町は、琵琶湖北東岸、湖北地方の南部に占地している。東西7.2km・南北5km・面積18.07km²の町域を有する。町内の最高地点は兜山山頂の標高315m、同最低地点は大字世継地先の天野川河口標高84mである。東は山東町、南は米原町、北は長浜市と境を接している。

南に霊仙山系から派生する丘陵、北に横山山系が迫り、その間を天野川が蛇行して流れる。これらの丘陵は、いずれも200m～300m程度の低丘陵であり、古生代に形成されたもので、輝緑凝灰岩・石灰岩と、チャート・砂岩・粘板岩から成っている。また天野川は、息長川・能登瀬川・箕浦川ともいわれ源氏螢が生息し、かすみ堤が作られているように相当な暴れ川で氾濫を繰り返した。しかし、その堆積作用によって広い沖積平野を現出させた。現標高90m前後の等高線が中位扇状地形の扇端部に当たり、それより低地側は、後背湿地となっている。また、旧河道に沿って自然堤防による微高地が発達している。一方後背湿地には、天野川の伏流水が湧水し、湿潤な土壌を生成する。

地理的には、古代東山道から北上する北陸道との分岐点にあたり、東海・北陸・山陰・畿内を結ぶ接点である。

このように、地形的にも地理的にも恵まれた環境にあって、近江町は絶えず政治・文化の上で豊かな歴史を刻んで来たのである。



第1図　近江町地形図

第２章　調査の経過

調査は、近年盛んとなってきた公共・民間各種開発事業に伴い、埋蔵文化財保護について様々な障害・問題が発生していることにかんがみ、より正確な遺跡の分布を明確にすることを目的としている。

調査期間は、昭和60年度より２ケ年計画で昭和61年度に現地調査と並行して、調査報告書を刊行することにした。町内を西部、東部の２地域に分割し、それぞれを各年度の調査対象区域とした。また表面採集遺物については、随時現地で2,500分の１及び1,000分の１の地形図に採集位置等を書き込み、総合的に判断して遺跡の範囲を決定した。

現地調査では、昭和46・47年に滋賀大学考古学研究会によって実施された分布調査の成果も踏まえ、平地では踏査による遺物採集を主とし山林では地表観察を主とした。

今回の調査は、現地踏査が主で、今後の調査・資料の蓄積によってその不備を補っていきたい。報告の遺跡範囲は現在までの到達点であり、今後変更の可能性があることを明記しておく。

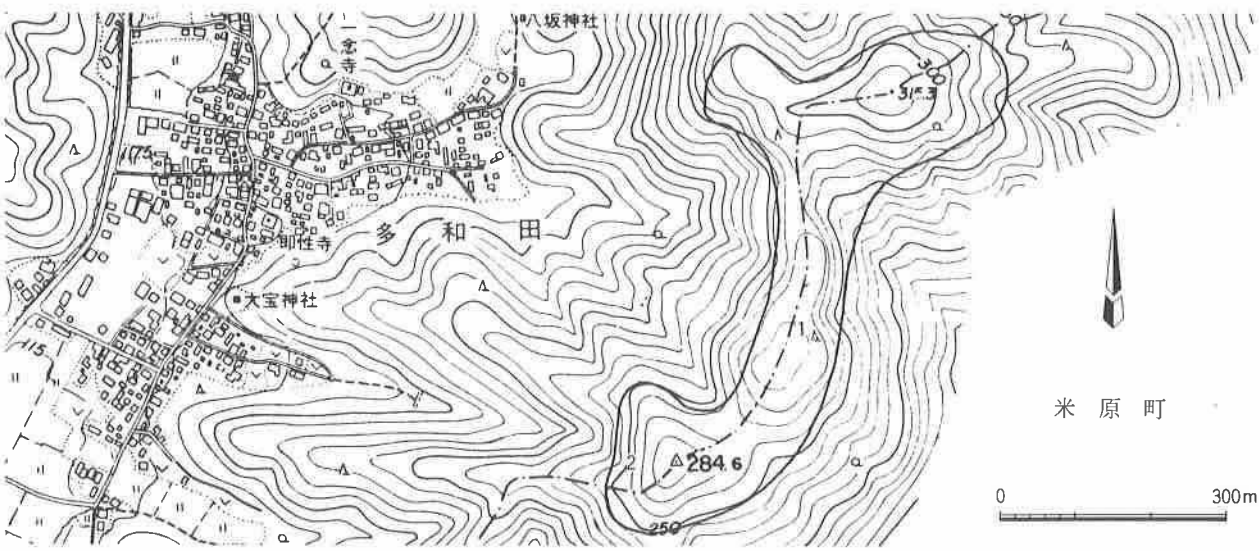
第３章　各遺跡の概要

醒井神籠石様列石（１）

醒井神籠石様列石は、近江町多和田と米原町醒井に跨る標高280～300mの兜黛山の山頂に築かれている。多和田の集落を西に望み、東から南に天野川が流れる。列石遺構は石灰岩の礫状岩石を土塁状に連続させたものである。この列石遺構は南・中・北峰で確認され、中峰が顕著に列石を有し、石灰岩が露頭する標高290mの山頂及び緩斜面に南北約153m東西長径55m短径31mを測る長楕円形であるが、東側西側２ケ所にわたり列石が途切れている。

これらの列石については『歴史と地理』・『県史跡報告』・『考古学雑誌』・『城郭分布調査』等で古代神籠石・山城説や中世以降の城郭説が唱えられている。

最近の論稿として、中井均「醒井神籠石雑考」（『滋賀考古学論叢』第３集）1986があげられ、自然石を無造作に積み上げて加工した石材をきちんと並べていない点、水門や門の跡がないところから、比較的新しい近世以降の産物ではないかとの見方がある。非常にユニークな説であ



第２図　醒井神籠石様列石位置図

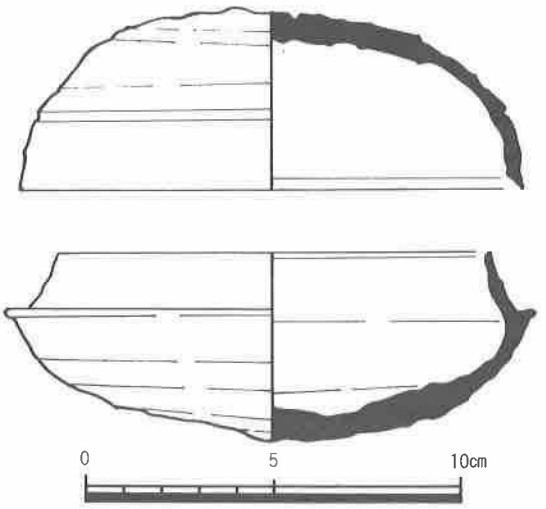
り、明治期にどういう起因でなぜ造られたか、実証を得たいところである。

山津照神社古墳（4）

天野川右岸能登瀬集落の背後の丘陵上山津照神社の社務所の西側に立地する前方後円墳である。従来全長43mと推定されているが、削土により墳丘が削り取られていると考えられ、全長は50mを越すものと考えてよいだろう。前方部と後円部の高さは、ほぼ5mでかわらず、前方部がバチ型に開く特異な墳形である。内部主体は横穴式石室と考えられ、明治15年の記述[註1]によると、石室長7.5m玄室幅2.7mで玄室床面積は12.15㎡を測る。奥壁には、屋形状の遺構が付設されており、何らかの施設（家型石棺とも考えられる）が想定される。古墳の年代は、石室内から出土した須恵器から6世紀でも前半の年代が与えられる。湖北地区において、6世紀でも古い段階に属する横穴式石室を主体部とする古墳は、湖北町四郷崎古墳においてほかなく、最初に築かれた最古期の横穴式石室であったと考えられる。

被葬者は誰であったか不明であるが、息長氏の一族であり継体天皇とも関係が深かった人物であろうか。

鏡・三輪玉・鉄刀・鉄塊・馬具・冠帽等の副葬品を有し、被葬者の優位性が窺える。鏡のうちの五鈴鏡は東国にその分布が知られ、最西端に位置し東国との関連が強い遺物と考えられる。



第3図　山津照神社古墳出土須恵器坏身坏蓋実測図

第4図　山津照神社古墳及び週辺の遺跡位置図

三輪玉は玉纏太刀の把部の勾金を飾っていたもので、被葬者の身分を示すものといえる。冠帽は広帯式とみられ、県内では高島町鴨稲荷山古墳で知られるのみで、朝鮮半島との関連で注目され全国でも島根・京都・福井の各府県で数例出土している。

平　面　図

断　面　図

第５図　山津照神社古墳墳丘図

宮ノ前遺跡（５）

能登瀬字宮ノ前に所在する寺坊と伝承されている遺跡で長老墓地川の南にある周辺の水田よりも一段高い畑地を中心とする。表面採集により平安時代後期の灰釉陶器碗片や山茶碗が見られ、平安時代の後期から鎌倉時代にかけての時期が想定できる。山津照神社の元宮青木神社の、東側にあたり、神宮寺と理解してもよいか。

宮ノ前北遺跡（６）

宮ノ前遺跡の北約200mの丘陵端部に位置する。南側水田中から時期不明の須恵器片とともに、須恵器窯の窯壁片を採集した。南斜面には、須恵器を生産した窯が存在していると考えられる。従来、近江町では須恵器窯は知られていなく、集落に供給する生産地が不明であった。横山山系南端にも須恵器窯の存在を知り得た。

能登瀬遺跡（8）

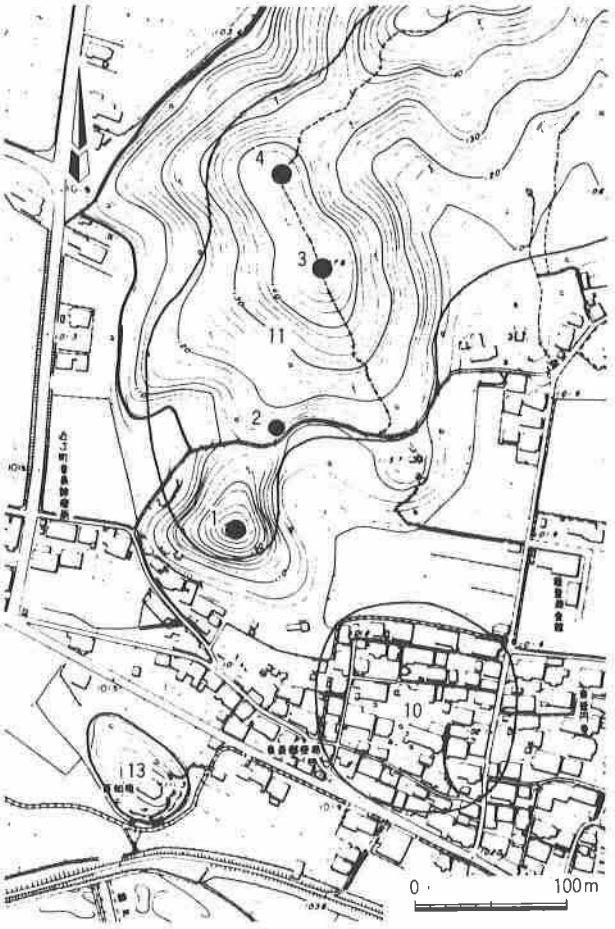
能登瀬の集落から山津照神社へ至る参道の西斜面に位置する。西斜面の尾根に沿って走る山出への道の斜面字オオキで鉄滓を採集した。この鉄滓は中に椀形滓があり、比較的軽く木炭を含む鍛冶滓と考えられる。善性寺への斜面は一段平担部があり、おそらくそこに鍛冶炉が存在しているのであろうか。付近には土器が採集されないので時期的には不明であり、今後の調査に委ねる。能登瀬には製鉄遺跡があった[註2]といわれて久しく、鉄は息長氏を解く上で重要な鍵であり能登瀬に鍛冶遺跡があるということはかつてマンガン鉱を産出していたという事実もあり、一概に古代までさかのぼるかどうかはいえないが、追認する一つの遺跡を提示しておく。

奥深古墳群（11）

能登瀬字奥深にあり山津照神社の丘陵の山出の谷部の西側の丘陵に展開する古墳群である。1号墳は丘陵先端の尾根上に築かれており径30mの円墳である。高さ5mを有し、よく完存している。2号墳は、息長診療所から山出に至る町道の北側に存し径10m高さ2mの円墳で南斜面に築かれている。3号墳は、2号墳の北尾根上に立地し標高147mに位置し、径21～22m高さ1～2mの円墳で墳頂に被掘穴がある。4号墳は3号墳の北60mにあり、径18～20m高さ0.6m～1.6mの円墳である。かつて須恵器片が約10点採集されており、6世紀の築造になると思われる。この古墳群が能登瀬に所在し山津照神社古墳とも至近距離（500m）にあるので、被葬者あるいは内部主体の点で関連性があるものと考えてよいだろう。

百如庵遺跡（13）

能登瀬集落の南西にあり息長三山の1つ天野川に面する標高111mの石見山の頂上に営まれた草庵である。慈芳[註3]という天台僧が安永7年郷里に創立した。彼は梵書を解し、和歌や書画、茶事にも通じて当時の文化人の1人でもあった。彼は自然をこよなく愛し、氾濫の多かった天野川の洪水を治める願いをこめて石橋に「南無阿弥陀仏」の名号を刻んでおり、念仏僧としての意味が強い。彼が修学した安楽律派の観心念仏の思想的影響や『百如庵記』の「南に向かい北を後に囲う一間の奥に阿弥陀三尊を安置す。前に掛けたる百如庵の額は、前輪王寺准三宮公遵法親王御筆を染め、本尊の後の西の窓に円窓あり。これを開けば落日さし入りて金容に輝けり…。」は、それを裏付けるものである。彼の宗教活動範囲は、松尾寺・成菩提院・布施付近にも及び百如庵を中心としてかなり広い範囲であった。なお、遺墨は分散しているが数多く残っている。



第6図　奥深古墳群及び周辺の遺跡位置図

大林寺遺跡（15）

大林寺（だいりんじ）は日光寺の字大林寺にあり、東西150m南北100mの南を日光寺川、東西北が丘陵によって隔てられた谷部に立地している。供養塔としての一石五輪塔や石仏に寺の隆盛を留めているのみで、寺の規模や伽藍（がらん）は不明である。当遺跡の南側で須恵器片を採集し、狭い谷の扇端部に営まれた寺の創立以前の集落であった可能性もある。

定納古墳群（16）

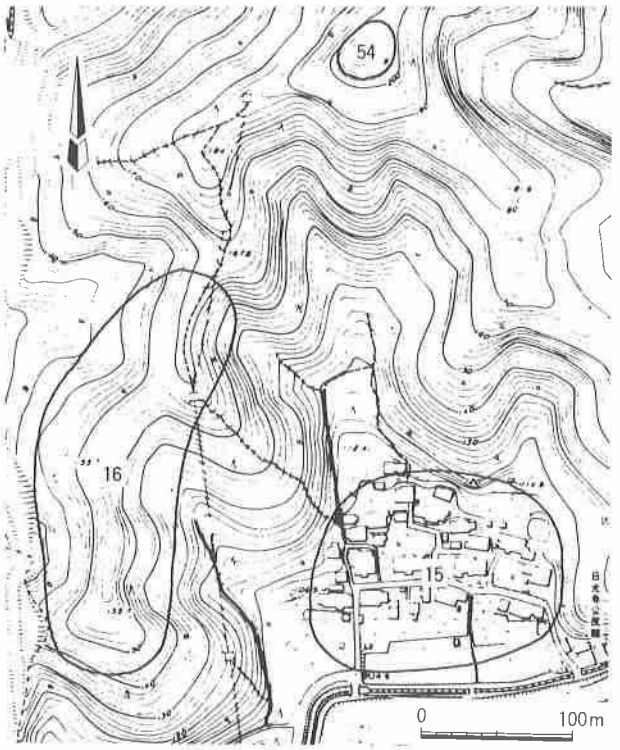
定納（じょうのう）古墳群は大林寺遺跡の西側尾根上に営まれた古墳群で、総数12基知られている。全て円墳で径10m～20m高さ0.5～２mの小さなものである。近江町内では何十基という古墳の群集は認められず、総数でも40基たらずであるが、この古墳群は最も多く築かれている。

寺倉遺跡（17）

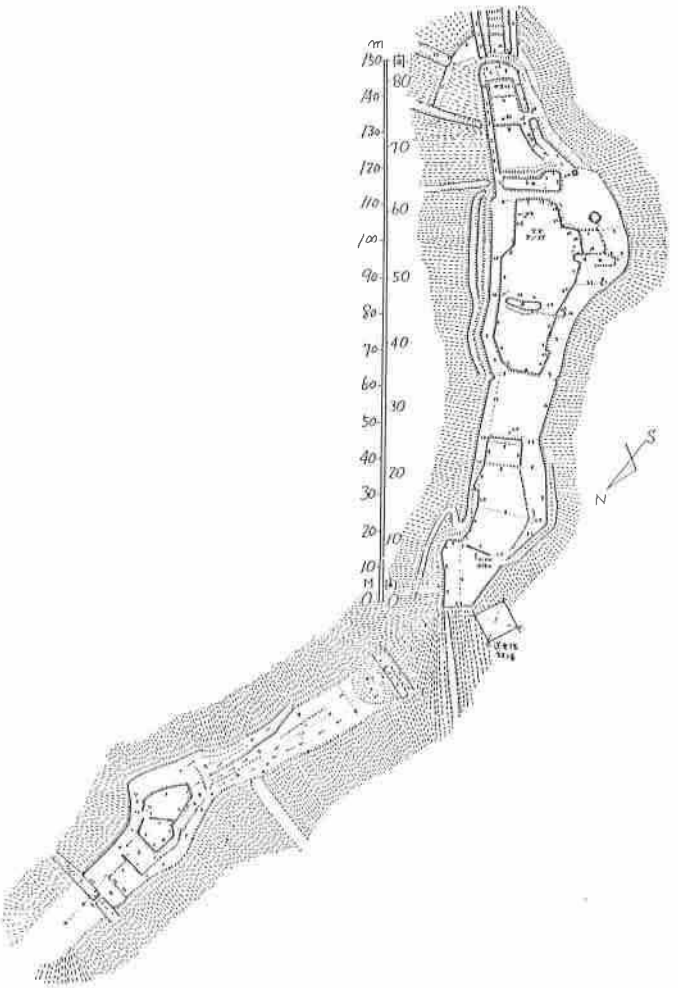
『改訂坂田郡志』に石斧（せきふ）が報ぜられており弥生時代までさかのぼるが、字仏光寺で平安後期の灰釉陶器片や字西ノ所で中世土師器を採集した。当遺跡が仏光寺の字名に残るように寺坊であり、平安時代後期から中世まで下る。

地頭山城跡（18）

中世地頭職であった土肥氏の山城で、天野川の右岸地頭山の山頂に築かれている。南東から北西に延びる長さ300m幅20～50mを測り土塁や郭の区画・犬走り・竪堀・堀切・カザシの大岩等の遺構があり、戦闘時の城砦として機能していた。東に中山道を望み大手は米原町門根、搦手（からめて）は北西谷部寺倉字天皇谷に求められよう。当城跡は付近の枝折城・太尾山城・顔戸山砦への連絡をとり合っており、箕浦の合戦をはじめとする天野川を狭んで繰り返された攻防の軍事的拠点であった。

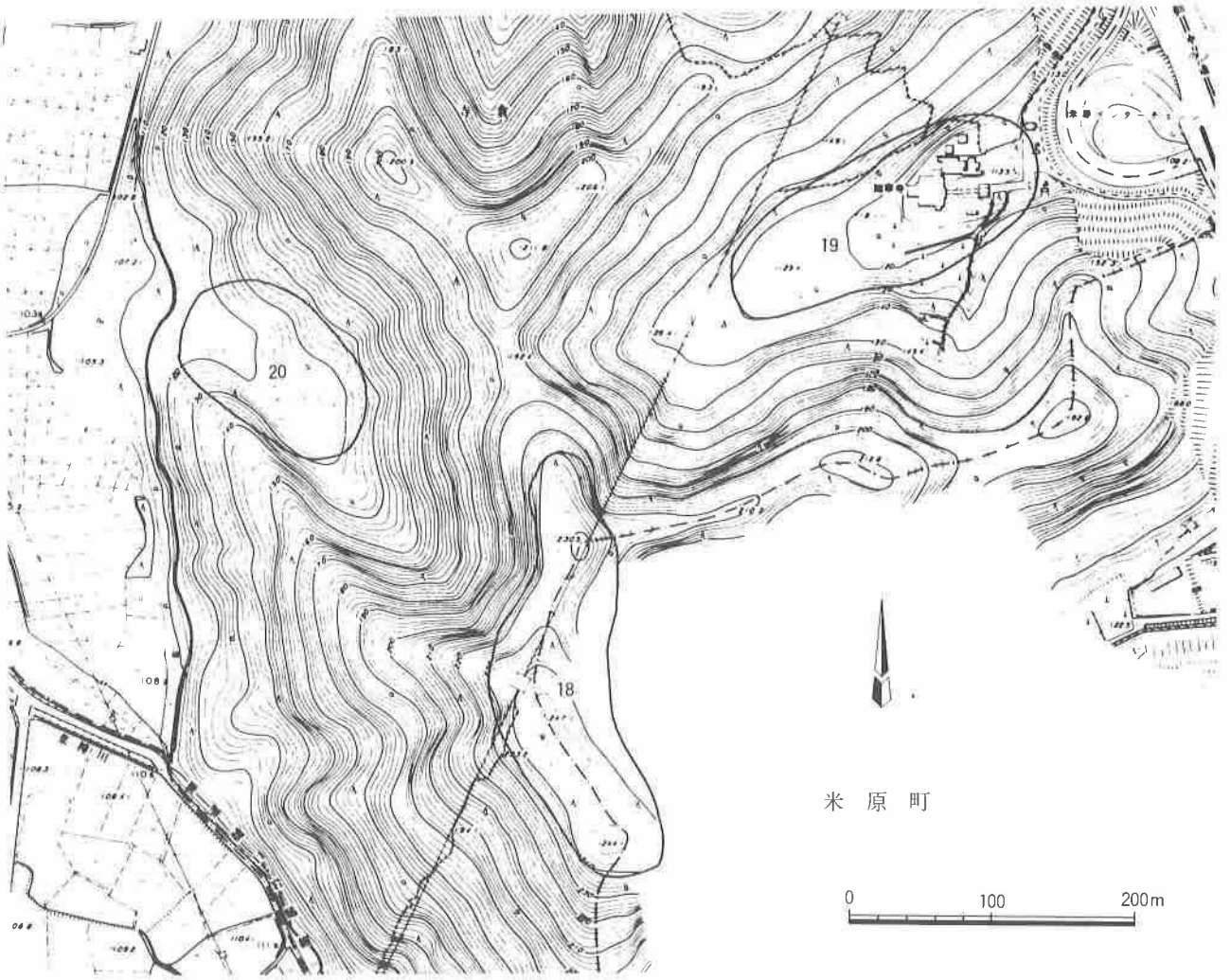


第７図　定納古墳群及び周辺の遺跡位置図



第８図　地頭山城跡主要部概要図

（長谷川銀蔵・博美氏原図）



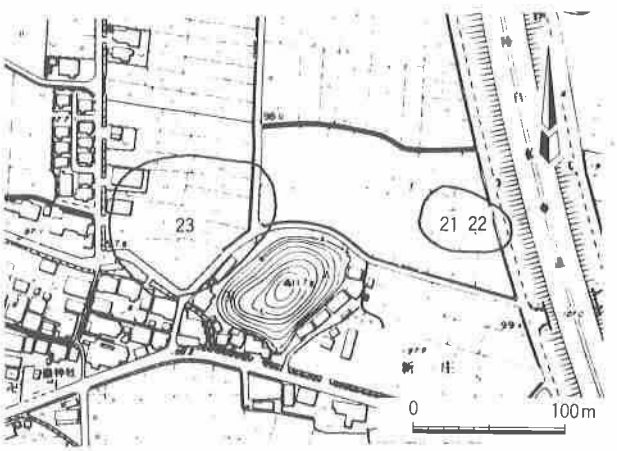
第９図　地頭山城跡及び周辺の遺跡位置図

塚の越古墳（21）

新庄字塚の越にあり、現在東西30m南北20mの雑木林になっている。前方後円墳といわれ鉄刀・鏡・金環・玉類が出土しており、中でも鏡は四神四獣鏡で径17cm内区鈕径2.4cmを測り彷製鏡である。須恵器片と円筒埴輪が周辺の水田から採集され６世紀に下るものと判断される。近江町における唯一の平野に有る前方後円墳で古墳を区画する周濠を持つと思われる。この古墳は中世以降に改変されており西側が土塁状に巡る。山津照神社古墳との前後差はわからないが相前後する時期に被葬者を同一氏族とする人物の墳墓であろう。

新庄遺跡（23）

新庄字小四郎町に所在し散布地として周知されていたが昭和60年個人住宅建設に伴う事前調査において、鎌倉時代の山茶碗や土師器類が出土し鎌倉時代まで遡ることがわかった。岡山の北東麓に営まれた集落であろう。ここは能登瀬と箕浦を結ぶ線上にあたり、通船川の中継点で物資の運搬に便されている。



第10図　塚の越古墳及び周辺の遺跡位置図

誓願寺遺跡（28）

現在の箕浦集落北西部通船川の南に造営された中世寺院跡である。正和年中創建といい湖北十ヵ寺の一つで一向衆の修行道場であった。後大阪藤井寺に移される。

埋塚遺跡（29）

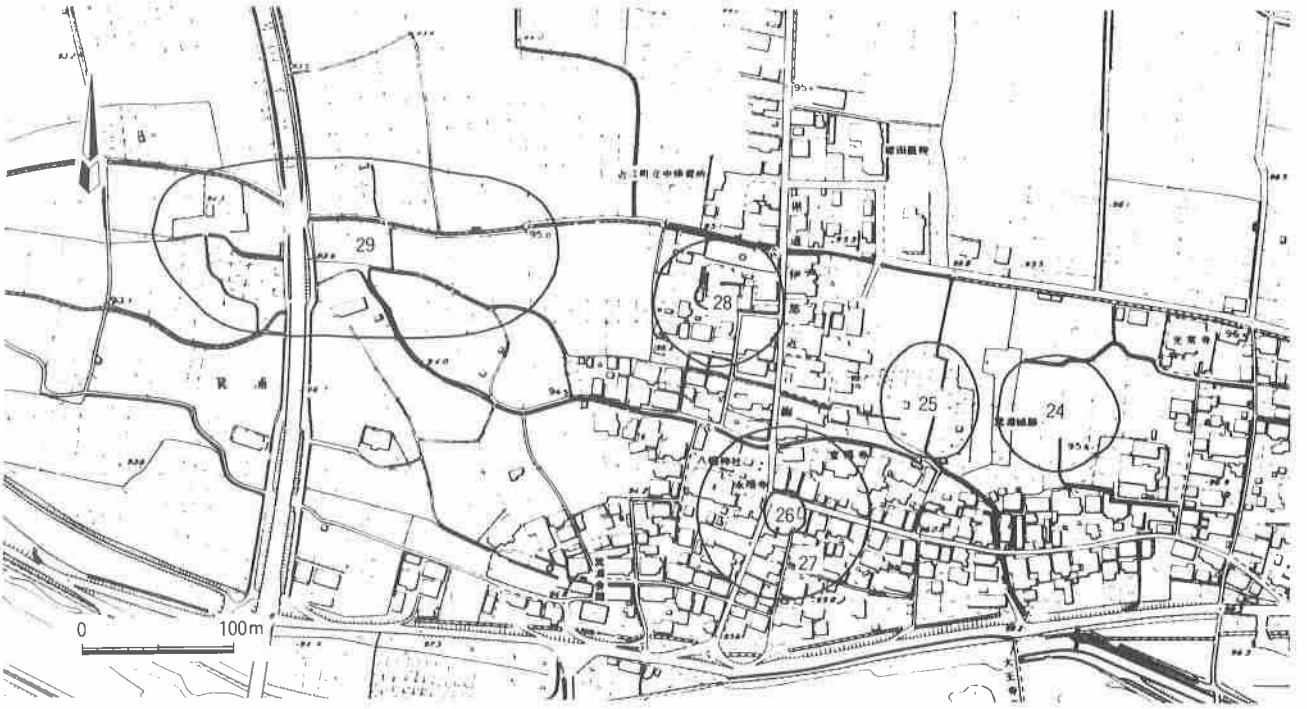
箕浦字坊の西・替添、顔戸字・埋塚（うめづか）・東埋塚に所在し「坊」の地名は寺坊の存在を予想させ平安時代後期の灰釉陶器・土師器片を採集した。また「埋塚」には地面の上に立つと“トントン”と鳴ったという伝承があり、地下が空洞になっていたようである。時期はよくわからないが、古墳の石室ではないだろうか。

西円寺遺跡（30）

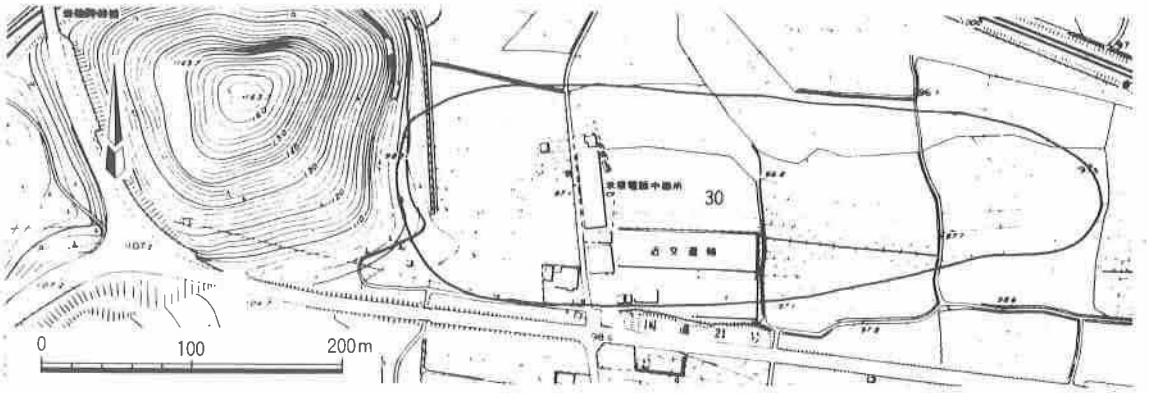
西円寺の米原電話中継所付近字大田・七々板・岡入にあり、天野川左岸の東菜種川、西丸山、南神塚に挾まれた自然堤坊上に立地している。弥生時代の集落跡として周知されていたが、須恵器・灰釉陶器・中世陶器片も採集されるので、中世まで下がる複合遺跡と考えられる。

太尾（ふとお）山城跡（33）

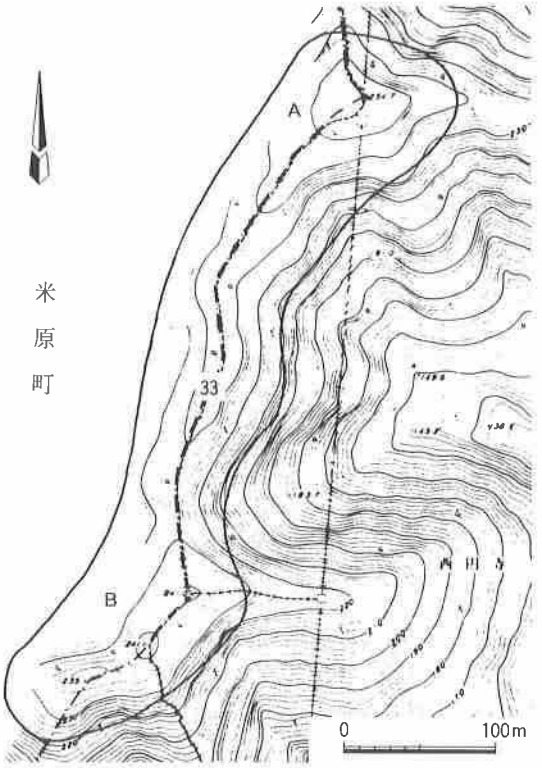
米原高校の南尾根上に南北500mにわたって築造された中世城郭で、土塁・竪堀・堀切・郭の区画が認められる。地頭山城とは直線距離1.5km、顔戸山砦とは3.5kmと近く、非常時の城砦としての意味が強い。



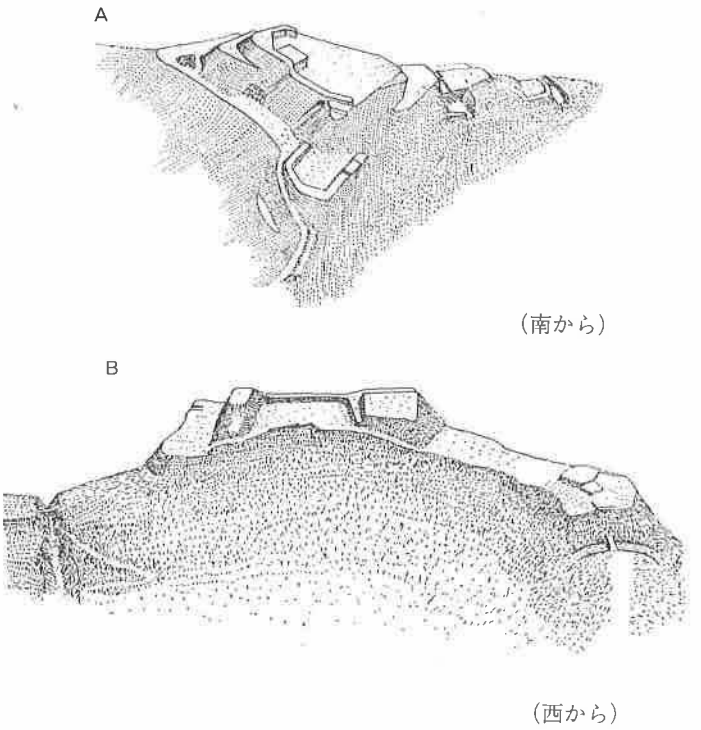
第11図　誓願寺・埋塚遺跡位置図



第12図　西円寺遺跡位置図



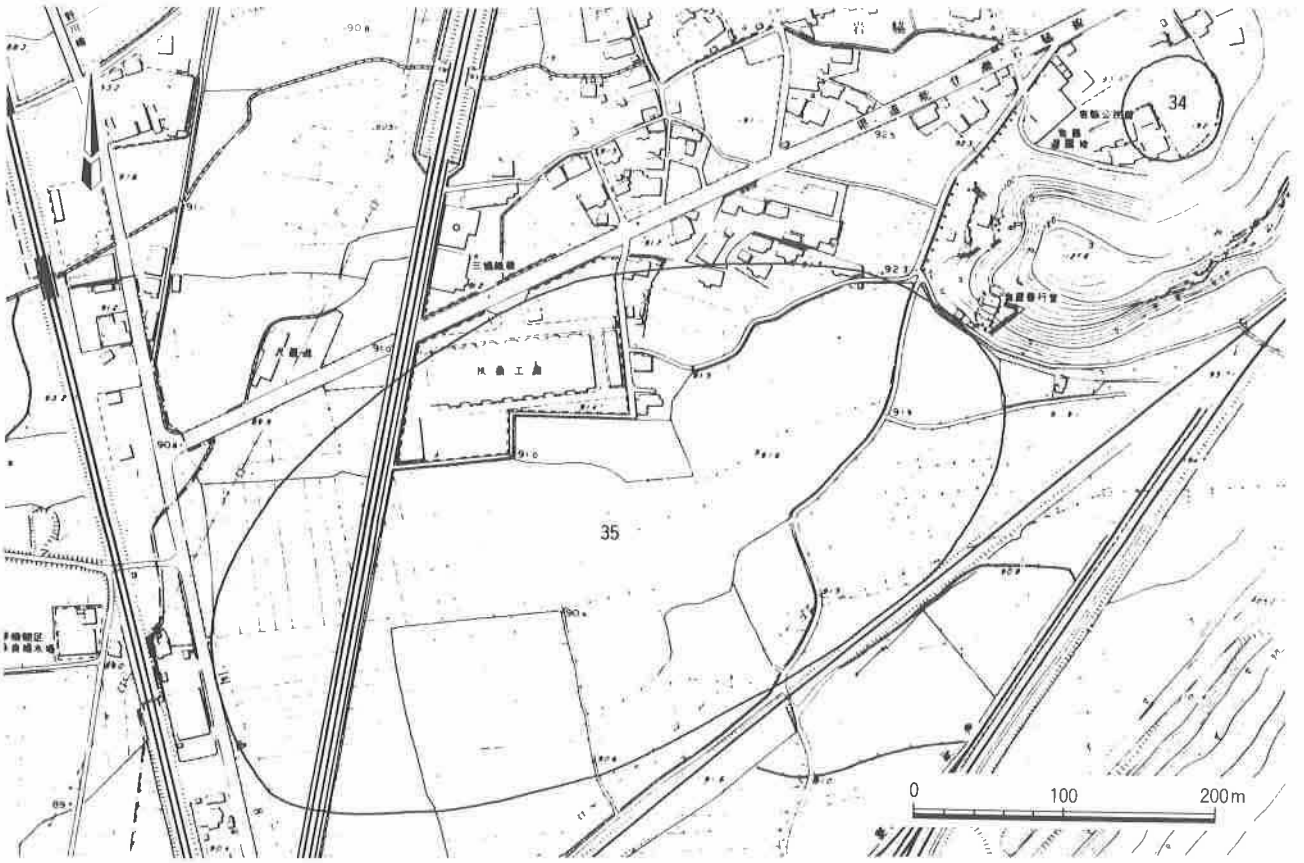
第13図　太尾山城跡位置図



第14図　太尾山城跡俯瞰図（長谷川博美氏作図）

岩脇遺跡（35）

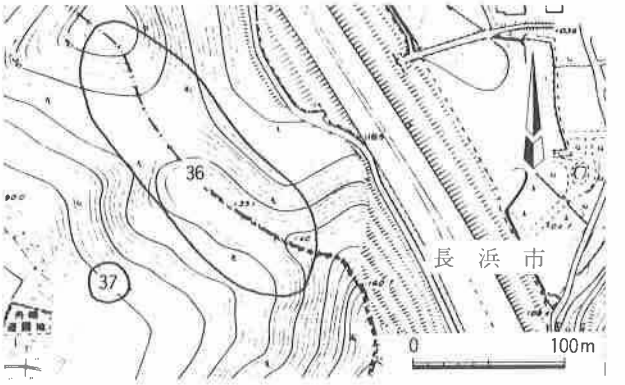
岩脇（いおぎ）集落の南一帯の水田には、飛鳥時代から奈良時代にかけての須恵器や土師器が広範囲に採集される。標高90～92m、東西550m南北300mに及び東西にやや長い。天野川左岸の自然堤防上、岩脇山の西方に営まれた集落であろうか。



第15図　岩脇遺跡位置図

舟崎遺跡（37）

舟崎集落の東方、顔戸山から延びる尾根筋の山麓に造られた経塚で、陶製経筒・経が発見されている。丘陵南西斜面に立地しすぐ南で須恵器甕腹部片を採集した。器壁の厚さ８～９㎜で外面は平行叩き内面は同心円青海波文を施す。尾根上に築造された古墳群が南西斜面にも下りていたか。

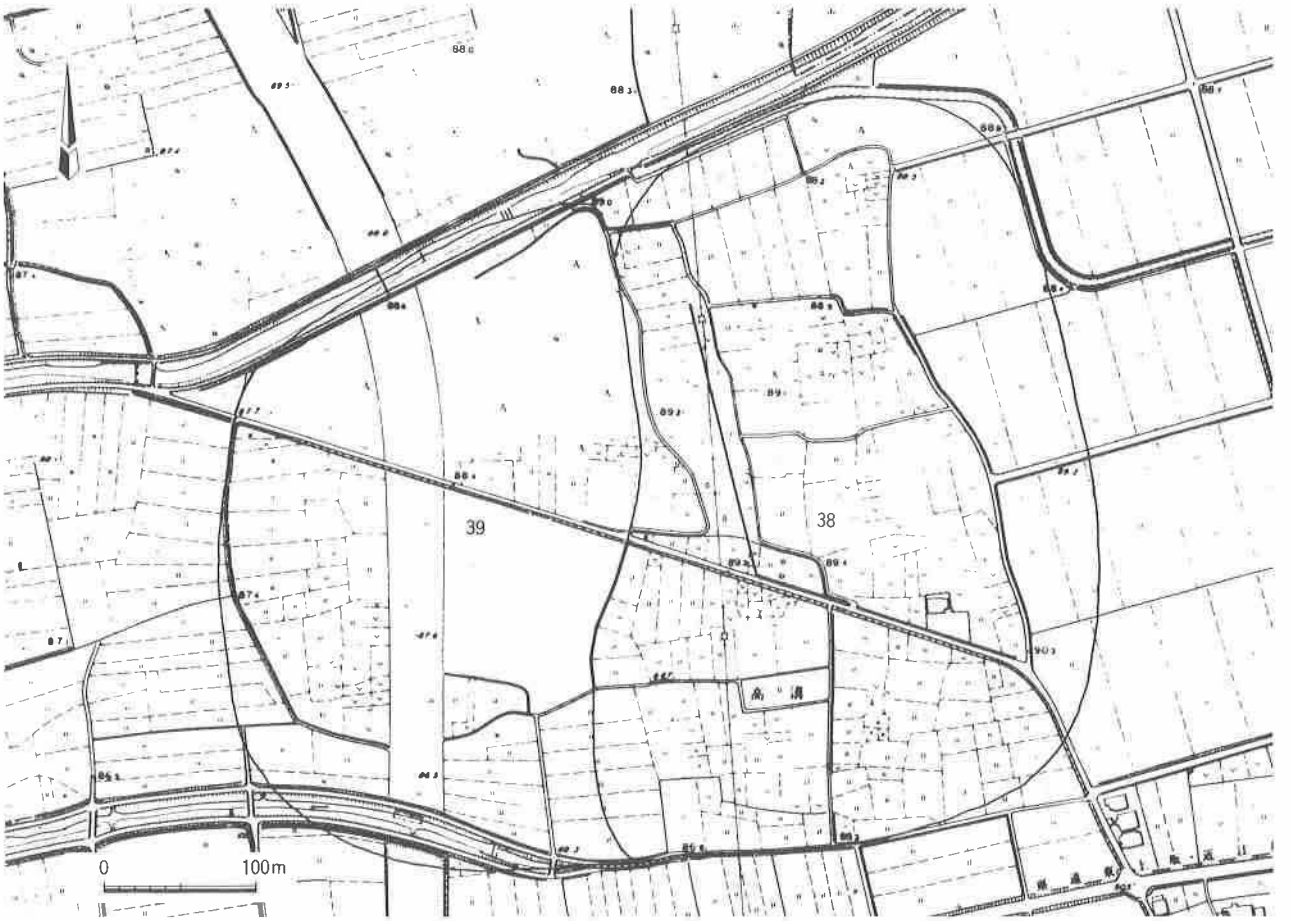


第16図　舟崎遺跡位置図

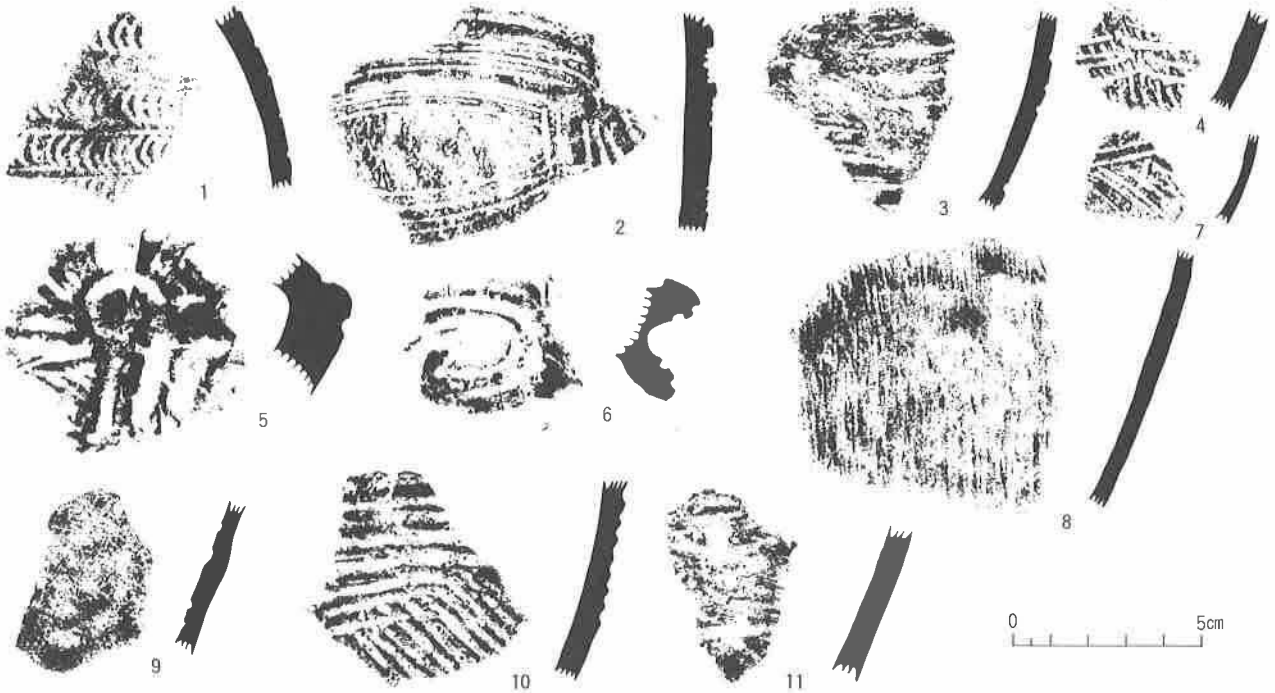
法勝寺遺跡（38）

高溝集落の北西400mに位置する縄文時代早期から鎌倉時代の集落跡・古墳・寺院跡である。

この遺跡の始源は縄文時代早期末（大川（おおこ）式押形文）に始まり、前期北白川下層ⅡＢ式爪形文土器第18図―１（以下同様）、中期勝坂式５，６・船元式２，３，４、後期磨消（すりけし）縄文９、晩期条痕文土器10，11が採集されている。早い時期から各時期を通じて多少の断絶があるかもしれないが縄文集落が営まれていた。弥生式土器は全体から採集され弥生時代末の時期のものであり、今のところ前期・中期の土器は発見されないが、石斧等の石器がかつて小字前川・沢で採集されている。古墳時代は、受口状口縁を有する甕を中心とする前期の土器や６世紀の須恵器坏・甕・金環等が採集される。小字蓮池には、二国



第17図　法勝寺遺跡位置図

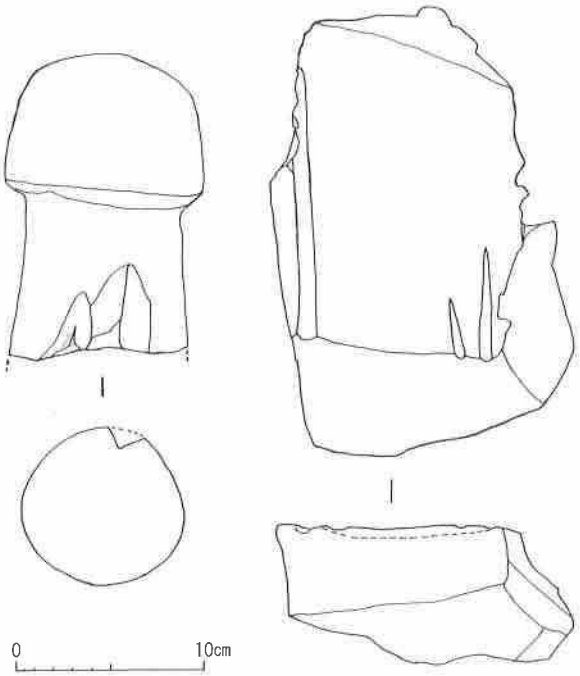


第18図　法勝寺遺跡出土縄文土器

家墓地の高まりがあり古墳の存在を窺わせる。小字地蔵・畑ヶ田では7世紀後半の須恵器・土師器とともに、多量の瓦が採集される。範囲は東西150m南北200mに及び、約80～100cmの畑地の高まりが2ヶ所見られる。この畑地が講堂・塔等の中心伽藍であった可能性もあり、白鳳時代の山田寺に併行する時期に造営された寺院跡である。出土瓦には、川原寺式や時期の下がる未詳型式のものもあり、平安時代まで続いていたようである。また広範囲に7世紀後半から鎌倉時代の須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・山茶碗が採集され、集落として機能していた。ちなみに当遺跡は、土川と琵琶田川に挟まれ条里地割より東に偏する真北地割であり、旧地形をよく残存している。小字沢・左近道・弥丸では真北に近い方位を持つ掘立柱跡が発見されており、寺院の僧房や官衙が寺院の北域に位置していたようである。当遺跡は息長氏の氏寺とも考えられ、重要度は高くほ場整備等により地形がかなり改変される恐れがある。精密な調査と保存・活用が望まれる。

狐塚遺跡（39）

法勝寺遺跡の西方高溝字狐塚・高畑に所在し縄文時代早期から鎌倉時代の複合遺跡で、集落跡・古墳群である。3次の発掘調査において、縄文時代早期末の大川式押形文や石匙・石鏃等弥生中期末の弥生土器、古墳時代前期の布留式土器、6世紀から8世紀の須恵器、土師器、平安時代の灰釉陶器、鎌倉時代の山茶碗・羽釜等が出土している。また遺構として、弥生時代中期末の溝、布留期の方形周溝墓、6世紀の古墳（帆立貝式古墳と円墳）、平安時代の掘立柱建物、鎌倉時代の溝があげられる。東は法勝寺と接し、西は碇遺跡、南は琵琶田川、北は土川に区切られている。布留期の古式土師器は、在地のものの他に東海・北陸・山陰の影響が色濃く反映されている。抉入石斧・絵画弥生土器・鳥形木製品・瓦質土器は、この遺跡を代表する遺物であり、広範囲の交流を予想させる。字高畑では、石棒や玉砥石も発見されている。玉砥石は古墳時代の所産になると考えられ、玉作遺構も推定できる。



第19図　狐塚遺跡出土石棒・玉砥石実測図

高溝遺跡（40）

高溝集落の西方に広がる東西350m南北300mの縄文時代から平安時代の集落跡である。縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・施釉陶器が採集され、字墓ノ町は墓地の存在を窺わせる。西に地形が低くなり、水田跡等の生産遺構も予想させる。

顔戸遺跡（41）

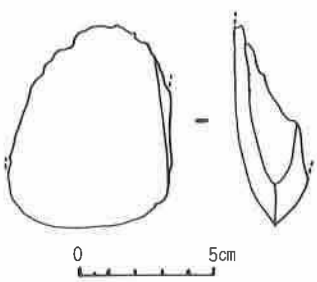
顔戸（ごうど）集落の北西方東西800m南北500mに及ぶ縄文時代前期から古墳時代の集落跡である。縄文前期の北白川ＩＩＢ式爪形文と大歳山（おおとしやま）式凸帯文、中期船元式里木式、後期中津式、晩期馬見塚（まみづか）式条痕文土器が発掘調査によって石斧・石匙とともに出土しており、前期から間断的に縄文集落が持続していた。弥生時代から古墳時代の集落も存在していたようで全体にわたり遺物が採集される。字塚町は墓地であった可能性が高く布留期の古式土師器が出土する。この遺跡西方は低湿地で沼沢が広がっており、水田跡の可能性も高い。

第20図　高溝遺跡位置図

第 21 図　顔戸遺跡位置図

安養寺遺跡（65）

顔戸字安養寺の小山南麓に所在する。弥生時代の蛤刃石斧片が１点採集され、弥生遺跡の存在を推定させる。安養寺は日撫神社の神宮寺であり、礎石・石仏・燈籠が見られる。いつごろ創建されたかは定かではないが、神宮寺は日撫（ひなで）神社を中心として山麓に多く造られる。



第22図　安養寺遺跡　石斧実測図

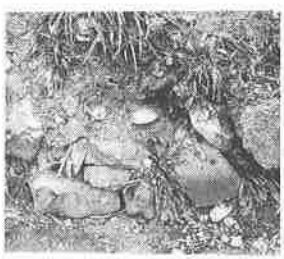
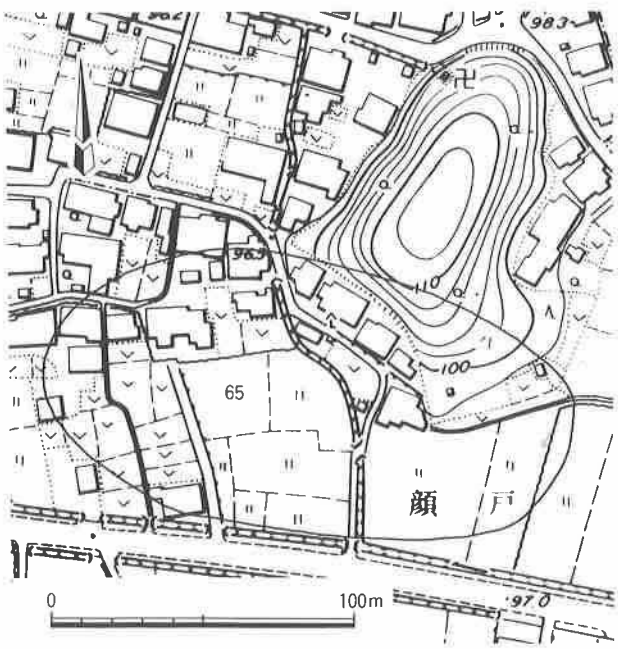


写真１　安養寺遺跡
石斧出土状況



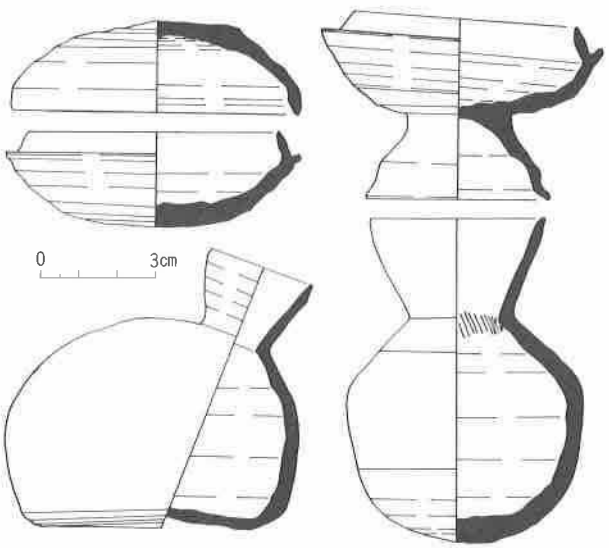
第 23 図　安養寺遺跡位置図

日撫山古墳（52）

日撫山の尾根上に築造された古墳で、朝妻山山頂から一の城（顔戸山砦）に至る字中あみたびに所在する。一辺10～15mの北東から南西に長い方墳で墳高１～２ｍを測り、低墳丘であるが近江町では他に事例がなく最も古い古墳であろうか。

人塚山古墳（48）

顔戸山の北西麓に造られた古墳で、須恵器坏・蓋・有蓋高坏・平瓶（ひらべ）[註4]・細頸壺・直口壺各１が出土した。６世紀第Ⅲ四半期に比定でき、山津照神社古墳より後出する。墳形は前方後円墳と考えられているが断定し難く北西側に造り出しがあったようであるが削平されていて不明である。



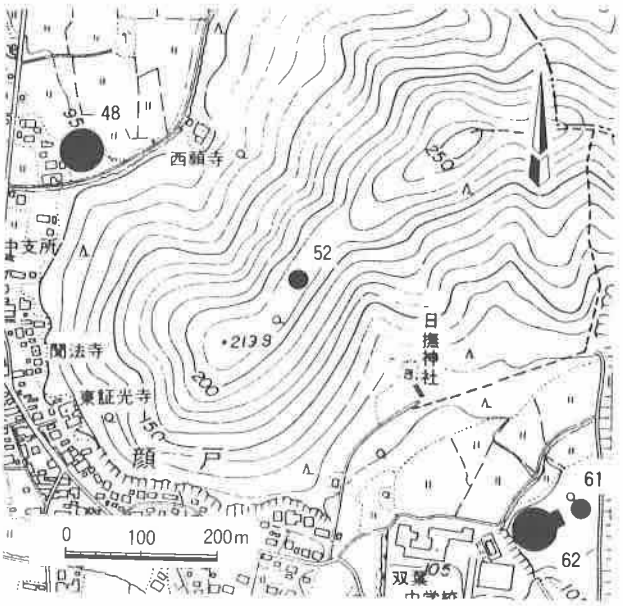
第26図　人塚山古墳出土須恵器実測図

亀塚遺跡（42）

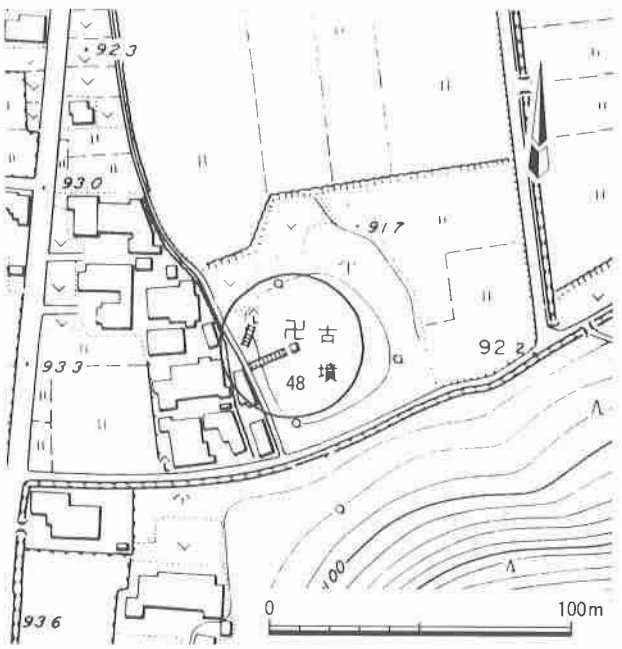
顔戸字亀塚に所在し、弥生土器や古式土師器とともに土師質円筒埴輪片・須恵器高坏が出土しており、６世紀の古墳で東に造り出しを持っていたようである。また８世紀の所産になる長頸壺片も出土している。ここは削平や盛土しているため詳細はわからない。

笹塚・鳴子塚古墳（46・47）

顔戸字西須戸にあり、塚名に墓地を匂わせる。笹塚からは、６世紀前半の須恵器瑳が出土して



第24図　日撫山古墳及び周辺の遺跡位置図



第25図　人塚山古墳位置図

おり、鳴子塚は石室の音が共鳴したであろう“トントン”と鳴ったという言い伝えがある。

顔戸山砦遺跡（53）

日撫山の最高所字一の城に所在し、頂上から南西に郭がある。天野川を対峙して地頭山や太尾山も至近距離にあり、砦として機能していたと思われる。西から南の麓には田中氏（土塁が残る）や池野氏等の土豪クラスが居し、日撫山麓に住する土豪たちが北方にもにらみが利く当所に砦を構えたと考えられる。

田中屋敷跡（49）

日撫山の西麓、県道東上坂・近江線が山にぶつかる北側にあり、一辺50mの平担地である。北を区画するかのように幅３m高さ２mの土塁が西に延びる。南麓には池野屋敷があり、かつて土塁が残存していた。

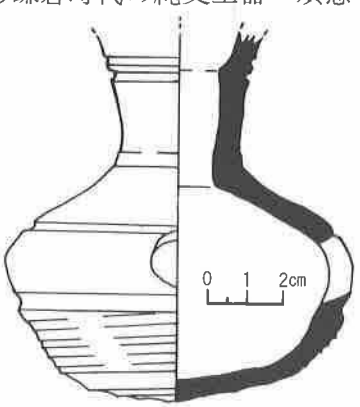
長沢関跡（70）

長沢集落の東方、畑として利用されている東西50m南北100mの高まりに所在する。長沢関は御陣屋と称し北国街道に面する関所として位置付けられる。表面採集で古墳時代の土錘が見られた。北国街道を挟んで長沢城・福田寺があり、交通の要衝として機能が高い。

第27図　長沢関跡位置図

土川湖底遺跡（75）

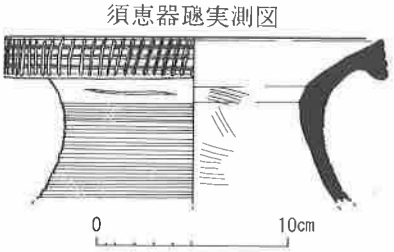
神明キャンプ場がある土川と琵琶田川の河口部には縄文時代から鎌倉時代の縄文土器・須恵器・山茶碗が採集される。上流から流されたものと判断されるが、湖底（浅瀬）からも採集され間断的な長期間に及ぶ集落跡と考えられる。



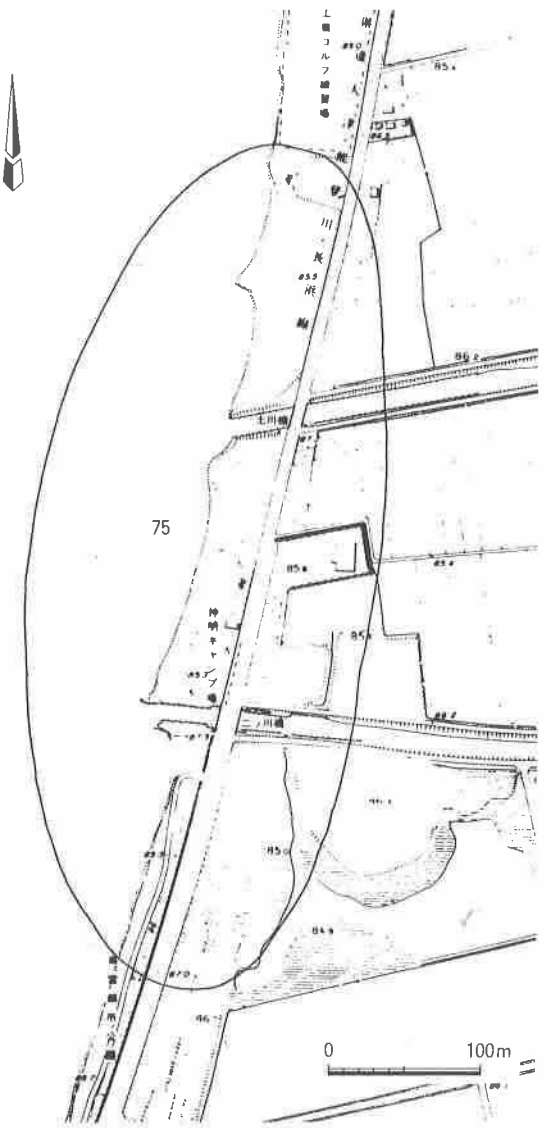
第29図　土川湖底遺跡出土須恵器瑳実測図

五反田遺跡(77)

宇賀野集落の北方水田中にあり、東西450m南北550mの馬蹄型に広がる。弥生時代の集落跡で、前期新段階から中期末の遺物を採集する。肥沃な低湿地に営まれた農耕集落でかつて磨製石剣も出土している。また、古墳時代にも集落が持続していたようで古式土師器が採集された。



第30図　五反田遺跡出土弥生土器壺実測図



第28図　土川湖底遺跡位置図

飯村廃寺遺跡群(89、90、91)

飯村集落の西方には寺院に因む地名が数多く存在する。北寺内・南寺内では南北地割があり、瓦が多量に採集される。正恩寺といわれるが、その由緒については不明である。出土する軒丸瓦は単弁八葉蓮花文で山田寺式と考えられ、法勝寺に劣らない白鳳寺院が想定され得る。山田寺式以外は現在では判明せず、あまり長期間存続しなかったようであり、廃絶後は寺地を変え複数に小規模な寺院が存在していたと推定され、地蔵堂・普明庵・金光寺が知られる。また灰釉陶器も多数採集され、平安時代後期に下限を降ろすことができる。法勝寺からは直線距離にして2kmで、天野川に面するという地理的条件からも法勝寺と並び高く位置付けられよう。息長氏の氏寺とも考えられ、今後の精密な調査が待たれる。

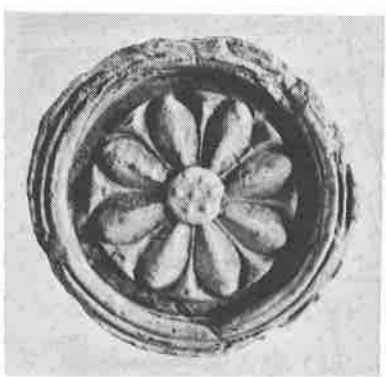
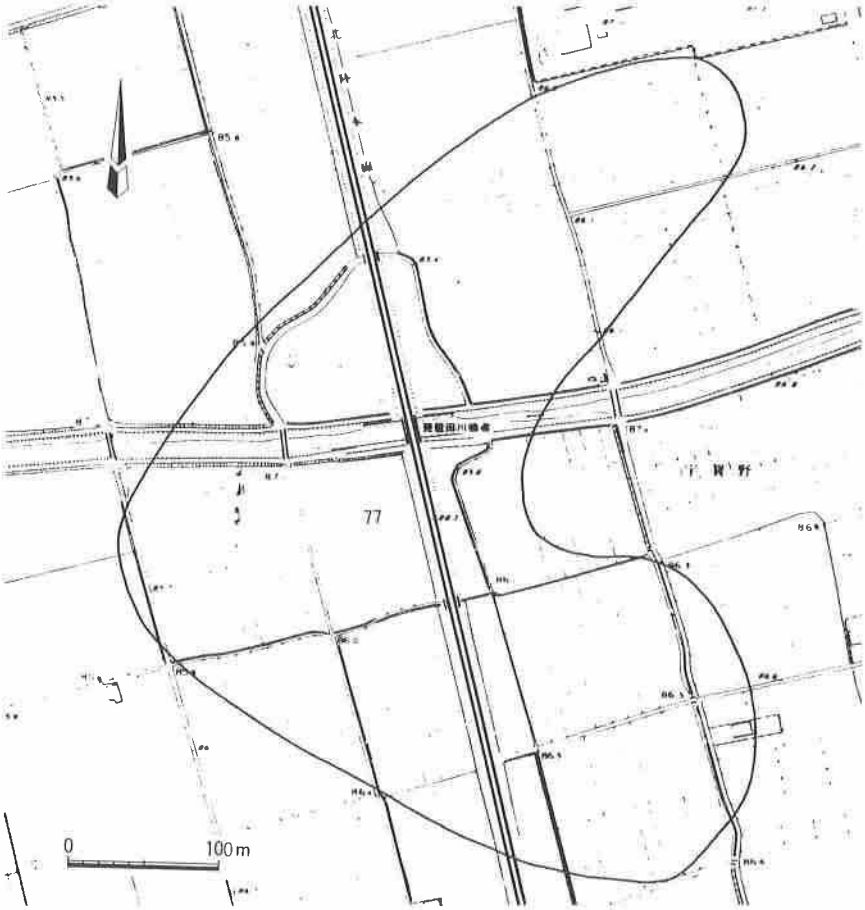


写真2　正恩寺遺跡出土軒丸瓦



第31図　　五反田遺跡位置図

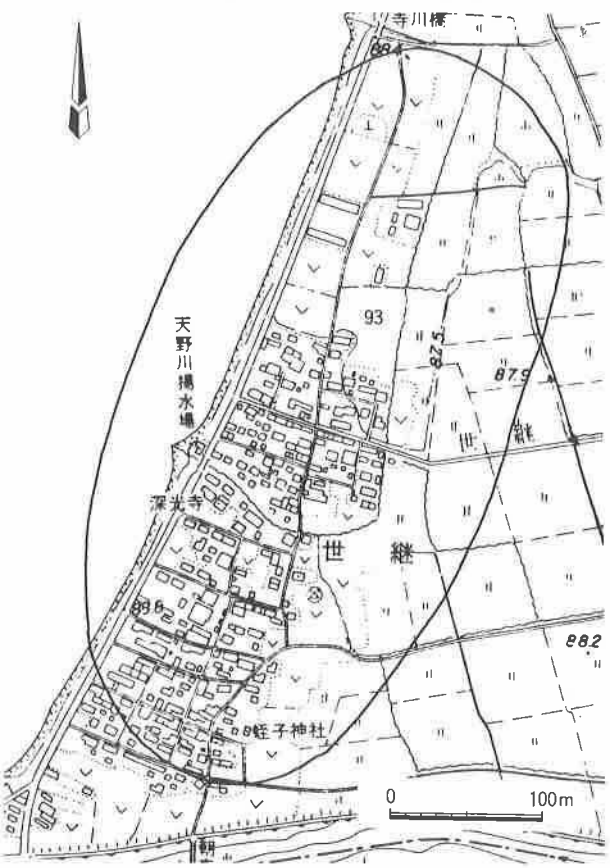
第32図　飯村廃寺遺跡群位置図

黒田遺跡（84）

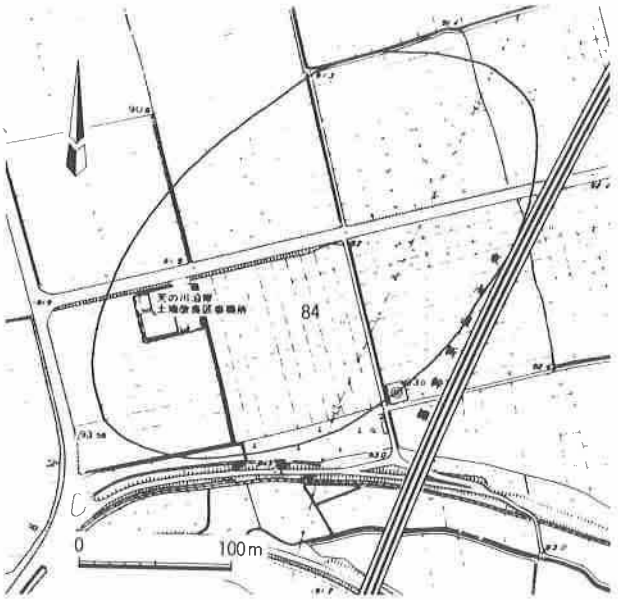
飯村集落の北東方字黒土・黒田・桑ヶ田・小角に東西300m南北200mにわたり須恵器や灰釉陶器が採集され、奈良時代～平安時代後期の集落跡である可能性が高い。飯村廃寺遺跡群は南西に位置し、天野川が北に大きく蛇行する地点にあたり、奉賽銭（第34図―６）の出土は興味深い。

世継遺跡（93）

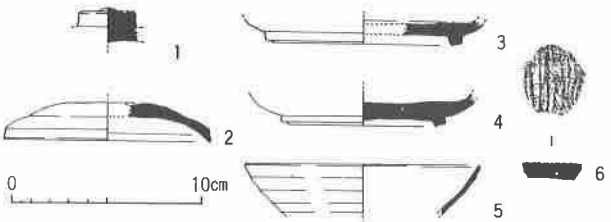
天野川河口右岸の世継集落に重なって東西400m南北１kmに及び縄文時代から鎌倉時代の集落跡である。縄文時代晩期滋賀里Ⅲ式（第36図―１）から出土が見うけられ、弥生土器や古式土師器、須恵器、土師器・山茶碗が散見される。古式土師器には北陸の月影式の影響（第36図―３）があり、平安時代初期の古銭富寿神宝の出土もある。小字名として、厨殿や堂ノ前の地名を残しており、朝妻や筑摩とともに湖上交通の港として機能していたように思える。



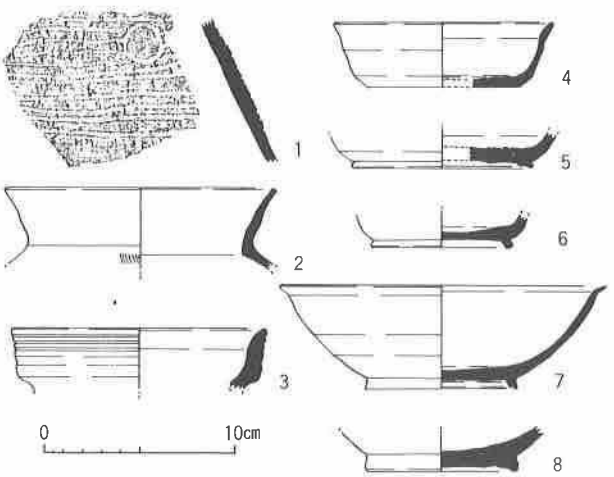
第35図　世継遺跡位置図



第33図　黒田遺跡位置図



第34図　黒田遺跡出土遺物実測図



第36図　世継遺跡出土遺物実測図

註

1　「古墳伝記及口牌流伝取調上申書写」

2　樋口清之「古代湖北の鉄文化」『歴史』第９号　滋賀県立長浜北高等学校歴史部　1961

3　『千界山百如庵の慈芳―近江町の先人―』　1984

4　「人塚山古墳出土須恵器について」『滋賀大学考古学研究会会報』　1972

第4章　ま　と　め

分布調査により、確認した遺跡は94ヵ所にのぼる。『昭和60年度滋賀県遺跡地図』滋賀県教育委員会刊行掲載の68ヵ所に対して１ヵ所削除されるが27ヵ所増えた。消滅した遺跡も含むが、今も地下深く埋もれているものがほとんどであり地表の観察だけでは、はっきりわからない部分が多い。遺跡を種類別に見ると、集落跡13ヵ所、古墳(群)20ヵ所、寺院跡30ヵ所、城館(関跡)17ヵ所、経塚１ヵ所、生産遺跡１ヵ所、遺物散布地14ヵ所である。散布地の中には集落跡、寺院跡、窯跡の可能性があるものを含んでいる。１つの遺跡にはいくつもの種類をもち時期により変遷しているものがあり、複合遺跡として周知される。また、実際に遺跡の性格を確認する範囲確認調査をしているものは、わずかで発掘調査により性格を変更するものもあると思われる。

時代別に見ると縄文時代10ヵ所、弥生時代12ヵ所、古墳時代28ヵ所、奈良・平安時代17ヵ所、中世以降16ヵ所、不明46ヵ所であり、寺院跡・城跡等時代が断定できないものが多く、今後検討する必要がある。また同じ遺跡でも時代がいくつもまたがり間断的にしろ継続している遺跡がある。古墳時代は多く思えるが、古墳が多数であるため決して多くはなく少ないといえる。今後新たに発見される資料により、時代も変化すると考えられ補充に努めるべきである。

古墳の数に対して集落跡が少なく、官衙跡や豪族の邸宅跡が皆無なのは交通の接点としての地理的条件や文献史学の裏付けに反して、臨場的に遺跡の性格を精密に判定する本格的な発掘、調査が少なく、未だ調査されていないところが多いためであろうか。法勝寺遺跡における南北に近い方向を持つ掘立柱建物・瓦の出土がある建造物を区画したであろう溝の存在は、充分にその存在を予想させてくれるが、その後調査の進行がないため明確にされていないのが現状である。また狐塚遺跡（法勝寺遺跡の西方）の３次にわたる調査では、６世紀代でも前半に遡る30m級の帆立貝式古墳の前方部西周濠―前方部造り出しの前端中央に樹立されていた観のある入母屋の家形埴輪（全高約90cmと60cm）２棟の出土があり、古墳時代豪族の主屋と住居を彷彿とさせる。そして、包含層出土であるが奈良期とも平安期とも考えられる石帯は、位階を授与された人物の所有物で役人が当地にいたということになる。何らかの役所があってもおかしくはないのではなかろうか。また、生産遺跡であるが、今回時期不明の大鍛冶跡を呈示し得たにとどまるが、窯跡の候補地として１ヵ所加えられ他に遺跡と断定できなかった箇所が２ヵ所チェックし得た。また中世城館は、(財)滋賀総合研究所が実施している「中世城郭緊急調査」に拠るところが多く、昭和62年度以降のより詳細な調査成果が待たれる。近世以降の遺跡は、近年における考古学の発達によりかなりの成果が公にされているが、近江町では１ヵ所のみで、窯跡を２ヵ所チェックし得たが遺跡として把握し得なかった。

写真３　狐塚遺跡帆立貝式古墳出土家形埴輪

1　旧石器時代

近江町内において確実に旧石器時代に遡る遺物は見られないが、狐塚遺跡で有舌尖頭器と思われるものが1点出土している。狐塚付近の遺跡群に居住していた人々は縄文時代早期には土器の製作を開始しており、それ以前に住みついたということはあながち否定できないと考えてよい。今後、資料の増加・検討を待ちたい。

2　縄文時代

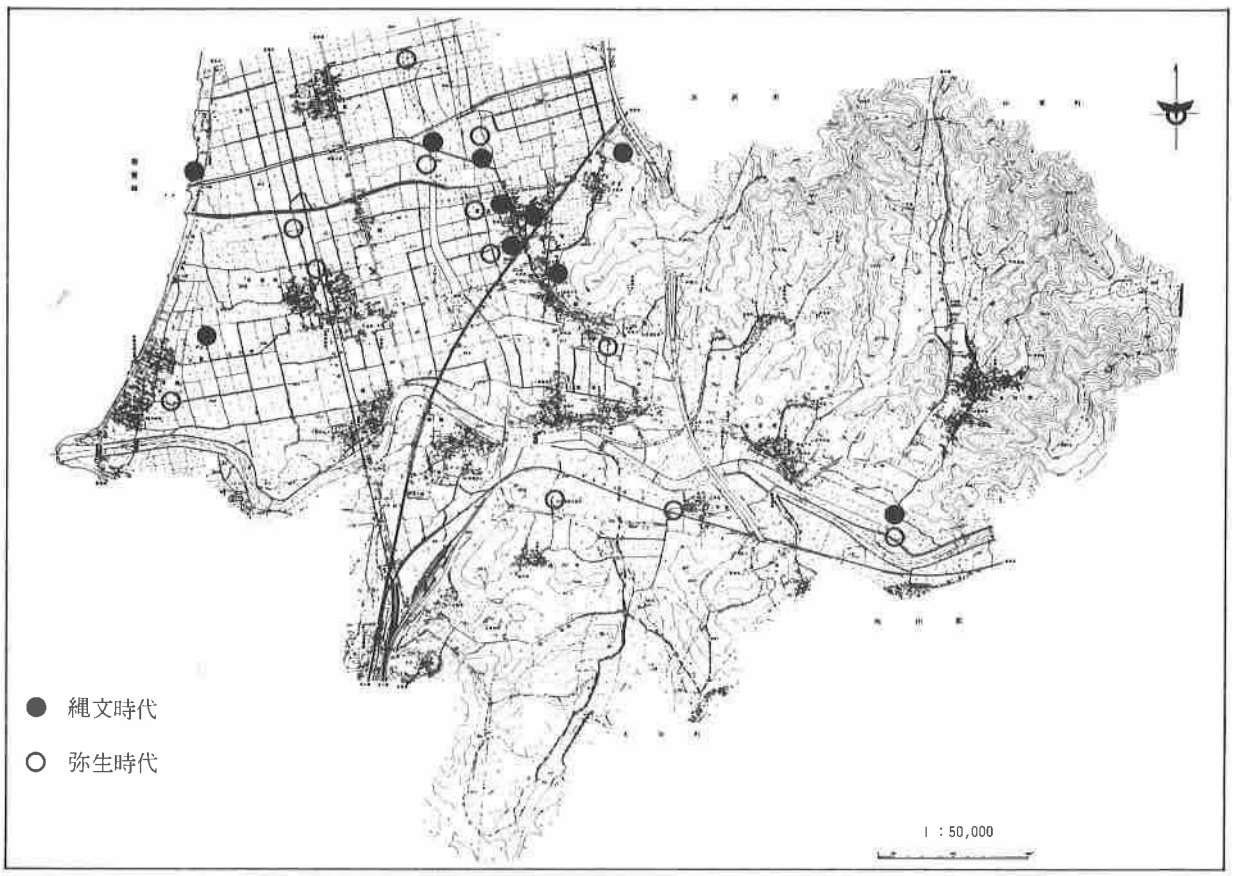
縄文時代に属する遺跡は10ヵ所知られる。うち時期がほぼ判明し集落跡と考えられるもの6ヵ所（早期から3ヵ所・後期から2ヵ所・晩期1ヵ所）で、散布地としたが石器製作地に想定できるもの2ヵ所（舟崎山・一本木）である。遺跡の分布は北西部に集中し、丘陵2・平地7・湖底1で、法勝寺付近では早期高山寺式あるいは大川式併行期から始まり、晩期まで間断的に断続している。また特筆すべきは、今回資料として提示できなかったが舟崎山の石器製作地であり、多量のサヌカイト剥片の散布があった。また、湖底にも縄文時代遺跡の存在が知れ、磨消縄文土器が採集された。後期に湖岸線の下降があったと考えられる。前期には北白川・大歳山式の影響が見られ、中期には、関東の加曽利式や瀬戸内の船元・里木式の影響が色濃い。晩期には滋賀里式はもちろん、東海の条痕文系土器（樫王・五貫森・馬見塚・水神平）も流入している。当町の縄文土器は、その位置にも反映されてか近隣の各時期各型式の影響を受けて独特の土器文化を現出させたと思われる。湖岸から法勝寺に至る平野部の低湿地には、顕著な遺跡は認められないが、晩期には顔戸・世継遺跡では低地に進行しており、弥生時代の到来を予期させる。特に晩期の土器と弥生前期土器の出土関係は明確でないため注意される。

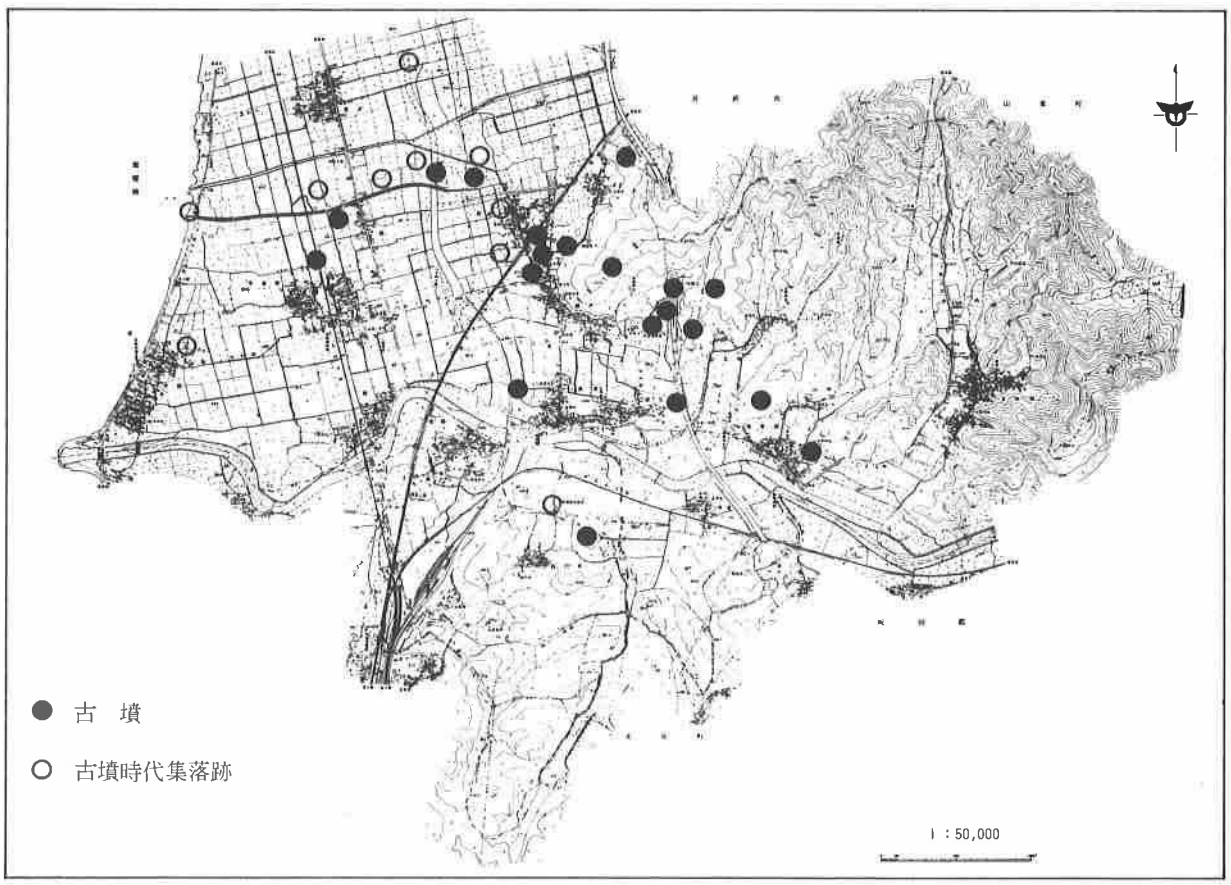
3　弥生時代

弥生時代になると遺跡の分布範囲も広がり、宇賀野や長沢の低湿地に及び、天野川左岸の自然堤防上に集落が形成される。弥生農耕は、まず北西部の平野部の湿地帯で開始され、湿田化されていき、中・後期になって東部のデルタ地帯にも農耕が伝播されたと考えられ、ここは少し遅れて地勢にもより乾田化されていったと思われる。北九州や畿内では縄文晩期に稲作農耕が始まっているが、遠賀川式土器は弥生前期中段階には伊勢湾まで伝播している。従来湖北地方への稲作ルートは、大和→伊勢湾を経て湖北へ至るルートが重視されてきた。山城から湖南経由説もあり、細密な土器の検討が待ち望まれる。現在知れる近江町で最も早い弥生遺跡は、狐塚・五反田遺跡で弥生前期新段階の土器の出土があるが、長浜平野では古段階の出土が伝えられ、また中段階には高月町磯野妙光庵遺跡まで北上していることから、さらに遡るものと考えられる。弥生中期には、稲の生産とともに集落も大きくなっていったようで、出土する土器量も多くなり、宇賀野・長沢遺跡の磨製石剣や狐塚遺跡の抉入石斧等特異な遺物がある。抉入石斧は凝灰質頁岩で北九州や朝鮮半島に原石を求めることが可能で、遠方からの人や物の移動が予想される。後期には、土器に畿内はもちろん東海の影響を受けたものが見受けられ、人の交流が窺われる。

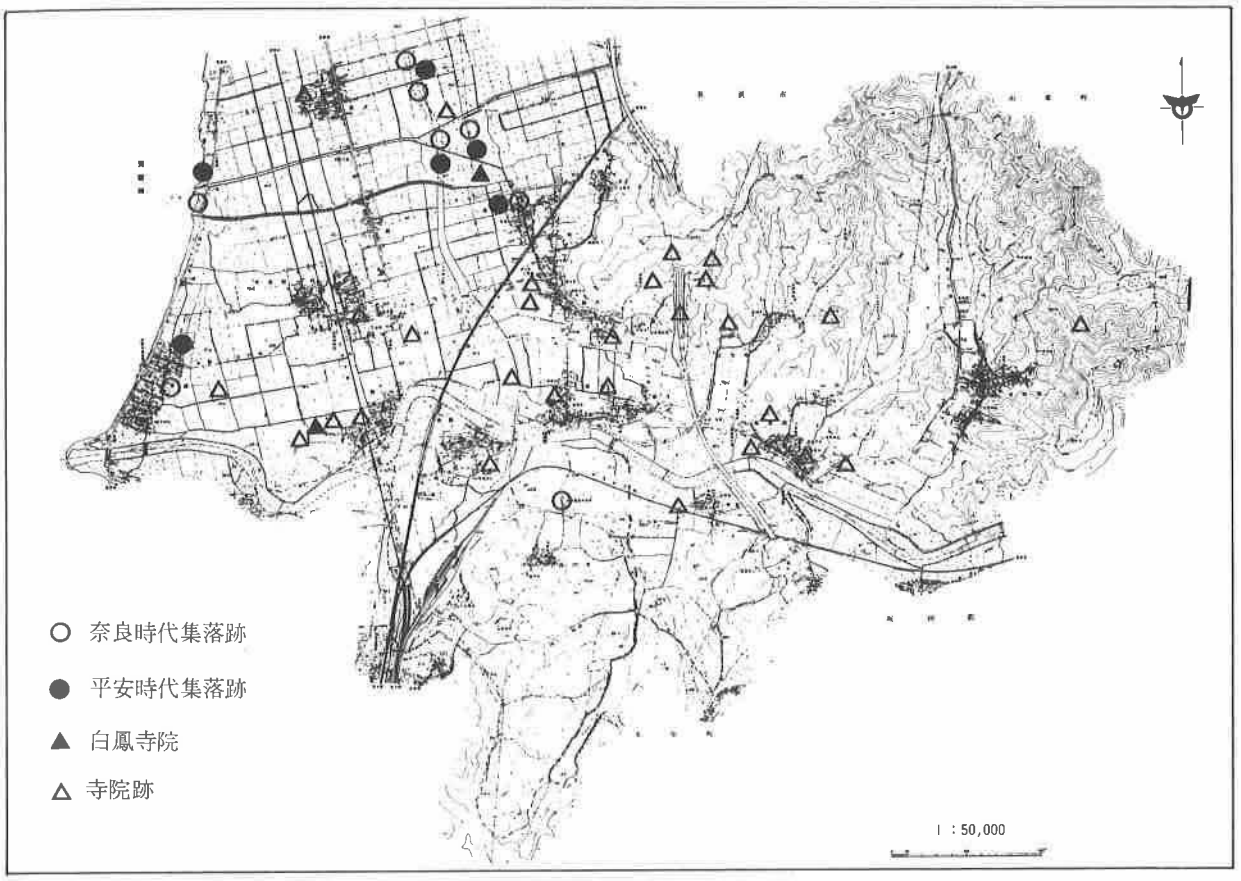
4　古墳時代

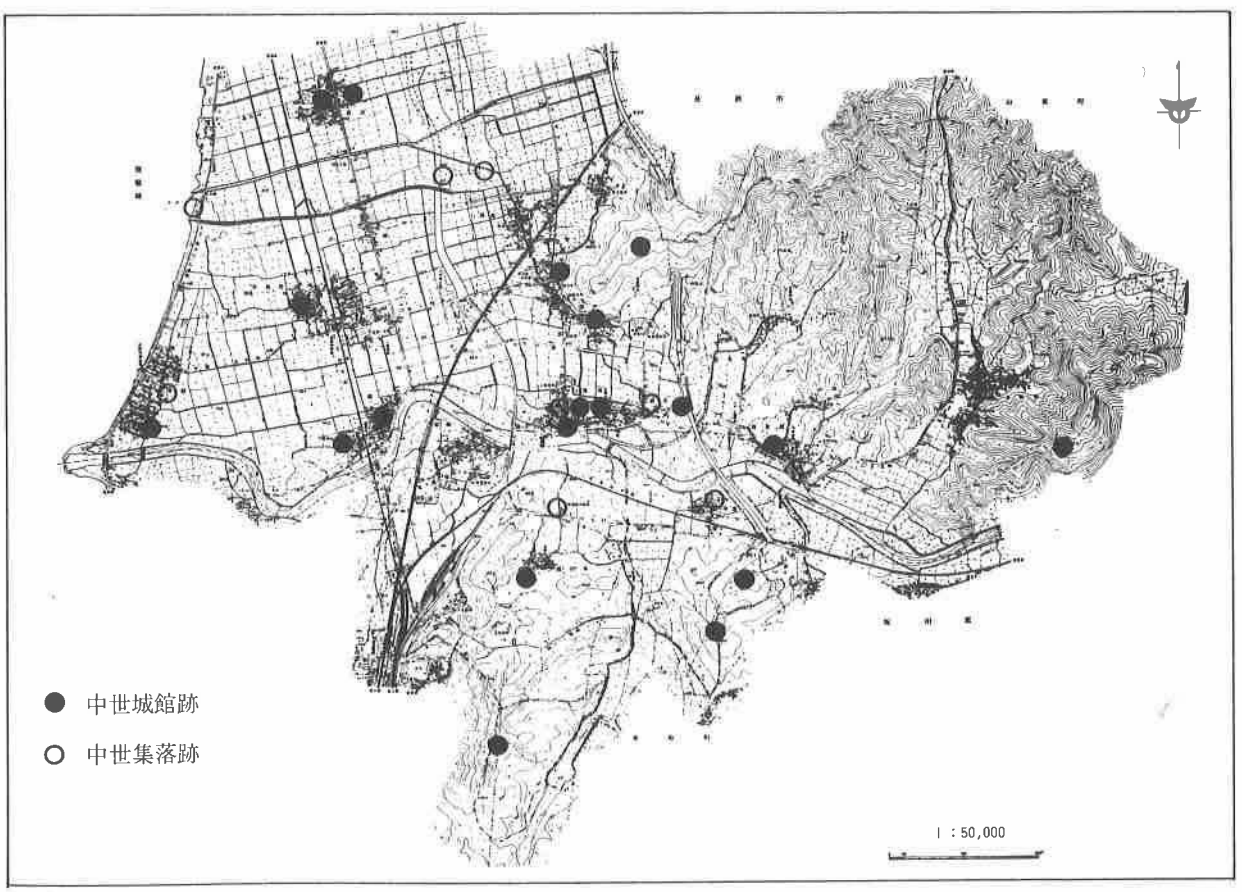
本町の古墳は、そのほとんどが後期に属し、中期以前は墳形や形状から日撫山古墳を数えるのみで、前・中期には顕著な古墳の発達は認められない。この時期の集落跡は、弥生時代から続くものが多く、その数もほとんど変らないが、今後増加すると考えられる。土器の特色として





第37図　近江町内遺跡変遷図(1)





第38図　近江町内遺跡変遷図(2)

在地・畿内の影響はもとより、東海・北陸・山陰の周辺地域との活発な地域交流があったものと思われる。

後期には、山津照神社古墳を含む息長古墳群が営まれ、在地豪族の拠点的地域を形成する。しかし、従来前方後円墳かとされた塚の越・人塚山古墳は後世の改変もあり明確化できない。今日埋塚、亀塚・笹塚・鳴子塚等を加えたが、平野部にはまだまだ古墳が埋められているものと思われる。横穴式石室の採用は6世紀前半に求められ、黄牛塚古墳に示されるように多くは有力家族単位に6世紀後半から7世紀前半に築造されたであろう。町内の群集墳は、山東町や長浜市の傾向と同じく群集規模が小さく、数十何百という群集がない。

山津照神社古墳の奥壁に設けられた屋形状の遺構は、黄牛塚古墳の奥壁に付設された土壇や土師器の壺と坩(かん)の出土とともに、特異な構築物であり、当地域の古墳を解明する上で重要な手がかりになると思われる。

また、埴輪窯は知られていない。

5　白鳳・奈良～平安時代

これらの時代の遺跡として、集落跡・寺院跡等が知られるが、官衙は不明である。寺院跡は法勝寺・正恩寺遺跡で瓦が出土しており、どちらも山田寺式の軒丸瓦が見られ、米原町三大寺遺跡や長浜市大東遺跡との関連が注目される。窯跡は、明確なものは認めらないが、散布地とした宮ノ前北遺跡の例に示されるように、今後地理的な占地から見ると、顔戸や西円寺で発見されるものと思われる。また2つも白鳳寺院を有するのに、瓦窯跡も今だ知られていない。

集落跡はその数が少ないが、白鳳寺院の周辺や前代から継続する集落がある。

条里制は、当地域では広範囲に施行されており、西部で顕著に認められる。施行時期については証左を得ていないので差し控える。

律令制下における坂田郡は、『和名類聚抄』によると、大原・長岡・上坂・下坂・細江・朝妻・上丹・阿那・駅家の九郷よりなり、このうち朝妻・上丹・阿那郷が町域に含まれると考えられているが、阿那郷については長浜市布施付近とする説があり、今後の研究を待たなければならない。文献において当地に居住した人名としては、「息長真人」があげられ、朝妻郷をその本拠としていたようである。

荘園制下では、東部に箕浦荘があり、西部に朝妻荘が知られる。

日撫山の山麓に造られた日撫神社の神宮寺は、神仏習合により生まれた本地堂であり、『日撫神社神宮寺焼失記』に見え、天正年間村人の手によって焼かれた。

6　中世以降

中世以降の遺跡としては、集落跡・寺院跡・城館跡が見られる。集落跡は前代から続くものと、新たに住み着いた集落とが挙げられる。後者は城館の分布にも顕著なように現在の集落と重複しており、現集落の成立時期を示唆するものである。寺院跡は興福寺に属する観喜光寺・法性寺とその別院や一向宗の福田寺、誓願寺が挙げられ、近世には石見山に慈芳の草庵が造られた。

城館跡は、地頭山・太尾山・顔戸山等の山城と平地に営まれた在地土豪層の居館である。

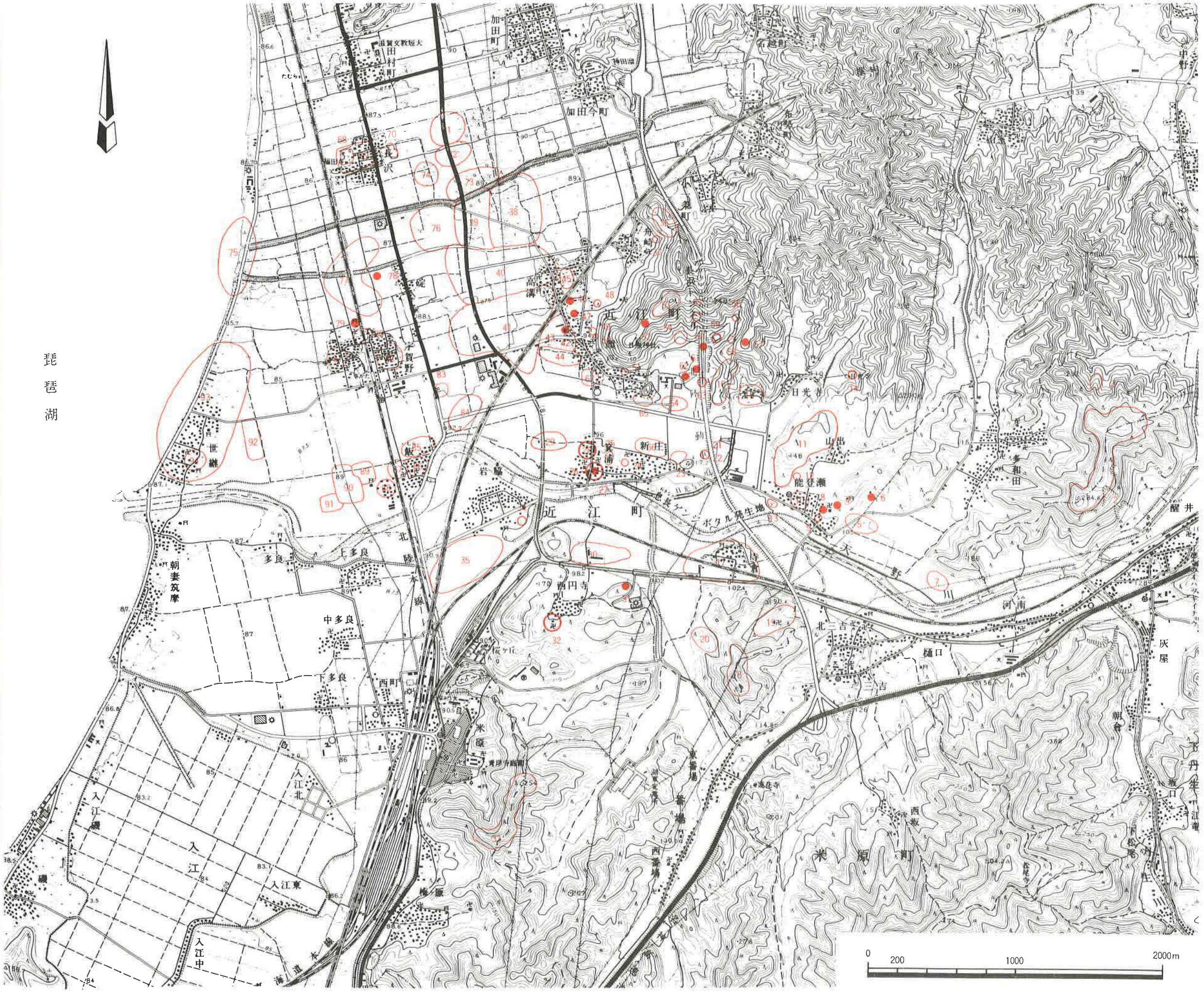
以上、近江町内に所在する遺跡群について、分布調査の成果を中心に概観した。今後の調査・研究により、訂正・加筆を加え、遺跡の周知化と町の長期的構想に則った遺跡の保護活用が急がれる必要がある。

7　遺跡一覧

番号	名称	所在地	種類	時代	立地	現状	備考	文献
1	醒井神籠石様列石	多和田	石塁		山頂	山林	(米原町)	「歴史地理」16-3・17-3、「県史跡報告」6、「考古学雑誌」1-2、「滋賀考古学論叢」3、
2	多和田城跡	多和田	城跡		山頂 山腹	山林	削平地・堅堀・(米原町)	「城郭分布調査」1、2、3
3	聖谷遺跡	多和田	寺院跡		山頂	山林	石塔・石仏	
4	県史跡 山津照神社古墳	能登瀬	古墳	古墳	兵陵	杜地	前方後円墳・横穴式石室・埴輪・鏡・馬具・鉄刀	「歴史と地理」15-3、「息長氏論叢」2
5	宮ノ前遺跡	能登瀬	寺院跡		平地	畑地	坊跡という	
6	宮ノ前北遺跡	能登瀬	散布地		山麓	水田	須恵器・窯壁片	
7	岩井遺跡	能登瀬	散布地	縄文・弥生	平地	水田	縄文土器・扁平片刃石斧	
8	能登瀬遺跡	能登瀬	鍛冶跡		山腹	山林	鉄滓	
9	善性寺遺跡	能登瀬	寺院跡		丘陵	寺地	延喜年間創建という	
10	能登瀬城跡	能登瀬	城跡	中世	平地	宅地		朽木文書
11	奥深古墳群	能登瀬	古墳群	古墳	丘陵	山林	円墳数基	
12	安能寺遺跡	能登瀬	寺院跡	鎌倉	丘陵	山林	山茶碗・青磁・平瓦・丸瓦	
13	百如庵遺跡	能登瀬	寺院跡	江戸	丘陵	山林		
14	日光寺遺跡	日光寺	寺院跡		山麓	寺地	坊跡あり・元慶年間名超童子創建伝承	
15	大林寺遺跡	日光寺	寺院跡 散布地		山麓	宅地 畑地	字名あり・須恵器	
16	定納古墳群	日光寺	古墳群	古墳	丘陵	山林	円墳12基	
17	寺倉遺跡	寺倉	集落跡 寺院跡	弥生～中世	平地	水田 宅地	石斧・字仏光寺	改訂坂田群志1
18	地頭山城跡	寺倉	城跡	中世	山頂	山林	削平地・堀切・堅堀・土(米原町)	「城郭分布調査」1、2、3
19	総寧寺館遺跡	寺倉	館跡		山麓	寺地 山林	土塁	
20	天皇谷遺跡	寺倉	散布地		山麓	山林	石垣	
21	塚の越古墳	新庄	古墳	古墳	平地	山林	前方後円墳・鏡・金環・玉類・埴輪・鉄刀	
22	塚の越砦遺跡	新庄	城跡		平地	山林	土塁	「城郭分布調査」1、2、3
23	新庄遺跡	新庄・顔戸	集落跡	鎌倉	平地	水田 宅地	須恵器・土師器・山茶碗	
24	新庄(箕浦)城跡	新庄	城跡	中世	平地	畑地 水田	今井氏本城・字名あり	「城郭分布調査」1、2、3
25	今井屋敷遺跡	箕浦	館跡		平地	畑地		
26	箕浦市場遺跡	箕浦	市場跡		平地	宅地		
27	井戸村館遺跡	箕浦	館跡	中世	平地	宅地		「城郭分布調査」1、2、3
28	誓願寺遺跡	箕浦	寺院跡		平地	宅地	正和年間創建という	
29	埋塚遺跡	箕浦・顔戸	古墳 寺院跡	古墳・平安	平地	畑地 水田	字埋塚・坊の西	
30	西円寺遺跡	西円寺	集落跡	弥生～中世	平地	畑地 水田	弥生土器・灰釉陶器・陶器	
31	神塚古墳	西円寺	古墳	古墳	丘陵	山林	円墳	
32	西円寺館遺跡	西円寺	館跡		接腹	山林		「城郭分布調査」1、2、3
33	太尾山城跡	西円寺	城跡	中世	山頂	山林	削平地・土塁・堀切・(米原町)	
34	護寧寺遺跡	岩脇	寺院跡		山麓	山林	歓喜光寺三別院の1	「興福寺官務牒疏」
35	岩脇遺跡	岩脇	散布地	飛鳥～奈良	平地	水田・宅地・社地	須恵器・土師器	
36	舟崎山古墳群	舟崎	散布地 古墳群	縄文・古墳	丘陵	山林	円墳数基・横穴式石室・須恵器・石器剥片・(長浜市)	
37	舟崎遺跡	舟崎	経塚		丘陵	山林	陶製経筒・経・須恵器	
38	法勝寺遺跡	高溝	集落跡・古墳・寺院跡	縄文～鎌倉	平地	水田	円墳・瓦・土器・礎石	「狐塚遺跡他試掘調査報告書」「滋賀文化財だより」No.19
39	狐塚遺跡	高溝	集落跡 古墳	縄文～鎌倉	平地	水田	帆立貝式古墳・円墳3基・埴輪・掘立柱建物・井戸・瓦	「狐塚遺跡他試掘調査報告書」
40	高溝遺跡	高溝・顔戸	集落跡	縄文～平安	平地	水田 宅地	縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・施釉陶器	「狐塚遺跡他試掘調査報告書」
41	顔戸遺跡	顔戸	集落跡	縄文～古墳	平地	水田 宅地	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器	「狐塚遺跡他試掘調査報告書」
42	亀塚遺跡	顔戸	古墳 散布地	弥生～奈良	平地	公有地	弥生土器・埴輪・須恵器・土師器・古墳消滅	
43	正光寺遺跡	顔戸	寺院跡		平地	畑地 水田	字名あり・須恵器	
44	長門寺遺跡	顔戸	寺院跡		平地	水田	字名あり	
45	一本木遺跡	顔戸	散布地	縄文～平安	平地	畑地	石器剥片・須恵器・灰釉陶器	
46	笹塚古墳	顔戸	古墳	古墳	平地	畑地	須恵器	
47	鳴子塚古墳	顔戸	古墳	古墳	平地	畑地		

番号	名称	所在地	種類	時代	立地	現状	備考	文献
48	人塚山古墳	顔戸	古墳	古墳	山麓	山林	前方後円墳？・須恵器	
49	田中屋敷遺跡	顔戸	館跡		山麓	山林	土塁	
50	山ノ前遺跡	顔戸	散布地	縄文	山腹	山林	石斧	
51	池野屋敷遺跡	顔戸	館跡		山麓	宅地	土塁消滅	
52	日撫山古墳	顔戸	古墳	古墳	山頂	山林	方墳	
53	顔戸山砦遺跡	顔戸	城跡	中世	山頂	山林	削平地	
54	仏光寺遺跡	顔戸	寺院跡		山麓	山林	日撫神社別当寺	「北自報告」V
55	円光寺遺跡	顔戸	寺院跡		山腹	山林	日撫神社別当寺	「北自報告」V
56	勝正寺遺跡	顔戸	寺院跡		山麓	山林	日撫神社別当寺	
57	甲塚古墳	顔戸・日光寺	古墳	古墳	丘陵	山林	円墳	
58	不明庵遺跡	顔戸	寺院跡		山腹	山林	日撫神社別当寺	
59	神郷遺跡	顔戸	散布地		山麓	溜池	柱	
60	黄牛塚古墳	顔戸	古墳	古墳	山腹	道路	円墳・横穴式石室・須恵器・消滅	
61	大正寺古墳	顔戸	古墳	古墳	丘陵	山林	円墳	
62	後別当古墳	顔戸	古墳	古墳	丘陵	山林	帆立貝式古墳・須恵器	
63	大正寺遺跡	新庄	寺院跡		山麓	道路	日撫神社別当寺	
64	稗田遺跡	顔戸	散布地		平地	水田	須恵器	
65	安養寺遺跡	顔戸	寺院跡 散布地		山麓	畑地 水田	礎石・日撫神社別当寺・石斧	
66	浄蓮寺遺跡	顔戸	寺院跡		平地	水田	字名あり・陶器・硯	「滋賀文化財研究月報」9
67	辻ノ前遺跡	顔戸	散布地	古墳～平安	平地	水田 宅地	土師器・須恵器・灰釉陶器	
68	長沢城跡	長沢	城跡	中世	平地	宅地	保元3年長沢太郎冠者土佐守築城・字名あり	「城郭分布調査」1、2、3
69	福田寺遺跡	長沢	寺院跡		平地	寺地	白風12年、名超童子創建伝承	
70	長沢関跡	長沢	関跡		平地	畑地	御陣屋と称する	
71	長沢遺跡	長沢	集落跡	弥生～平安	平地	水田	土器・木製品	「国道8号線バイパス分布調査」 「国道8号線バイパス報告」III
72	西火打遺跡	長沢	集落跡	平安	平地	水田 畑地	掘立柱建物	「狐塚遺跡他試掘調査報告書」
73	奥松戸遺跡	長沢	寺院跡		平地	水田	瓦・法性寺跡・末寺・宿坊残存	「国道8号線バイパス分布調査」 「狐塚遺跡他試掘調査報告書」
74	北松戸遺跡	長沢	散布地		平地	畑田 水田	須恵器	
75	土川湖底遺跡	長沢・宇賀野	集落跡	縄文～鎌倉	湖底	湖	縄文土器・須恵器・山茶碗	
76	碇遺跡	宇賀野・長沢・高溝	集落跡	古墳～奈良	平地	水田 畑地	掘立柱建物 土師器・須恵器	「国道8号線バイパス分布調査」
77	五反田遺跡	宇賀野	集落部	弥生～古墳	平地	水田	弥生土器・土師器	
78	墓町古墳	宇賀野	古墳	古墳	平地	水田	円墳・土師器	
79	塚町古墳	宇賀野	古墳	古墳	平地	水田	円墳	
80	宇賀野墓町遺跡	宇賀野	集落跡	弥生	平地	畑地 水田	弥生土器	
81	宇賀野館遺跡	宇賀野	館跡		平地	宅地		「城郭分布調査」1、2、3
82	歓喜光寺遺跡	宇賀野	寺院跡		平地	寺地	礎石・須恵器・文武天皇元年義淵創建	
83	大王寺遺跡	宇賀野	寺院跡		平地	水田	字名	
84	黒田遺跡	飯箕浦	散布地	奈良～平安	平地	水田	須恵器・灰釉陶器	
85	出原遺跡	飯	散布地		平地	水田 畑地	須恵器	
86	飯村城跡	飯	城跡		平地	宅地		「城郭分布調査」1、2、3
87	金光寺遺跡	飯	寺院跡	平安	平地	水田	灰釉陶器	
88	若宮城跡	飯	城跡		平地	宅地 畑地		「城郭分布調査」1、2、3
89	地蔵堂遺跡	飯	寺院跡		平地	水田	瓦	
90	正恩寺遺跡	飯	寺院跡		平地	水田	瓦・字名あり	
91	普明庵遺跡	飯	寺院跡		平地	水田		
92	世継寺遺跡	世継	寺院跡		平地	水田	字名あり	
93	世継遺跡	世継	集落跡	縄文～鎌倉	平安	宅地・水田・畑地	石鏃・縄文土器・弥生土器土師器・須恵器・古銭	
94	世継館遺跡	世継	館跡		平地	宅地		「城郭分布調査」1、2、3

琵琶湖



第39図　近江町遺跡分布図

付論１

坂田郡近江町顔戸日撫山古墳測量調査報告

粕渕　貢、泉　朝美

はじめに

日撫山（朝妻山）は、古代朝妻港（天野川河口）から見ると、秀麗な神奈備山として美しい姿を望むことができる。この山麓には人塚山・塚の越・山津照神社などの古墳が知られているが、山頂や山稜にはこれまでその存在が知られていなかった。然し最近の近江町に於ける分布調査では、朝妻山山頂から一ノ城の山頂にかけての鞍（あん）部に古墳らしいものが存在することが予想された。このため私たちはその実態を究明するため、古墳調査の忘れられた原点ともいうべき墳丘測量調査を実施したのである。

調査の成果

はじめにも述べたように、日撫山の山頂から北東へ延びる稜線上の鞍部には大小二つの地形の起伏が認められ、北西側のものは（最も低くなった鞍部よりのもの）は、自然地形の起伏にすぎず古墳とはなしがたいものであった。然しこの小さな高まりの東側稜線まじかの斜面には岩座ではないかと思われる巨石が峻立（しゅんりつ）している。

ここで測量した古墳は、この巨石のさらに南西側の稜線上に位置する古墳である。朝妻山頂から古墳までの間はおよそ120mをへだて、山麓部の院内から一ノ城に至る山道が稜線に達した個所から古墳までは北東へおよそ60mにすぎない。古墳は海抜およそ206mである。

この稜線上からは、竹生島や山本山が手にとるように望むことができる景勝の地である。然し近江町南部の平野部は朝妻山山頂にさえぎられ望むことは不可能であるが、高溝の縄文時代以来の拠点集落を眼下真近に望むことができる。

古墳は尾根筋に沿った長辺およそ15m短辺およそ13mのやや長方形を呈する方墳である。北東短辺は山道により比高差１m弱であるが、この部分の山道を除去して考えた場合、墳丘の裾部を画する一条の空堀が埋没しているものと考えられ、この場合の墳丘比高差は1.5mを予想することが可能であろう。この短辺の南北の隅部は、その稜がやや流れているとはいえ明瞭なものが感じられる。また北側長辺では巾１m弱のフラット面が形成されており、或いは墳丘のすそ部かとも思われる。また南長辺では、墳頂からマイナス１m強の部分で山稜側面の角度がかわることから或いはこの部分が古墳のすそではなかったかとも思われる。しかし確証はない。この場合の古墳の短辺の長さはわずか９mである。南西短辺はやはり盛り上がった山道によって観察を難しくしているが、その左右では明瞭な裾部が観察される。特に南西コーナーは、遺存状態がすぐれている。ただ、山道の左右で裾部の位置はすこし双方にずれがみうけられることが気になるところである。然し北西すみ部が墳丘もふくめてかなり流失していることから、このような違いが観察されるものとも思われる。この部分での墳丘比高差は２mを測るものである。地形の雰囲気からみてこの短辺すそ部にも一条の空堀が埋没していることが予想されよう。墳丘には葺石や埴輪は認められずその内部主体も横穴式石室ではなく、木棺直葬や簡単な粘土槨を予想することが許されよう。その年代も六世紀中葉を下るものではありえない。現在近江町で判明する最古の古墳とすることができる。

むすびにかえて

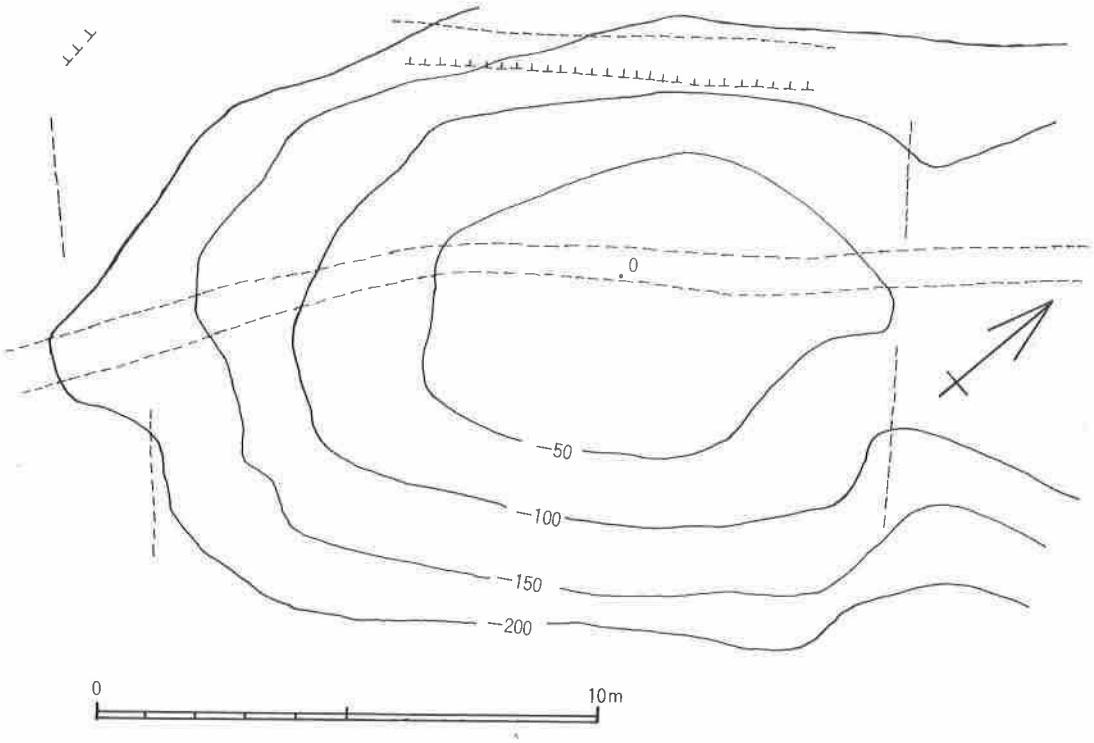
以上測量調査の成果にうかがわれたように、当古墳は従来知られなかった日撫山山稜上の唯一の古墳であることが判明した。またその墳形も方墳という特異な形をとるばかりか尾根筋に沿った長方形墳を示すことに注目される。この古墳が何時築かれたものか残念ながら現在不明であるが、新しい時代のものでないことは充分予想される。また、湖北北部から北陸にかけて同様な長方形墳がしばしばみうけられ、それらの年代が四・五世紀にさかのぼるものであることはよく知られた事実である。近江町の古墳文化の究明は今日その緒についたばかりのものであり、今後町内の詳細な古墳の分布調査を行い、地道な墳丘測量調査などが果たされることによって、息長氏の故里がより具体的に明らかにされることであろう。

記

この古墳測量は1986年9月11日、丸山竜平氏の指導により、粕渕貢・村岡勝次・泉朝美・粕渕信・須戸源隆の面々がたずさわったものである。ここに末筆ながら関係諸氏に感謝の意を述べたい。

日撫山古墳遠景（北西から）

日撫山古墳近景（北東から）



日撫山古墳墳丘測量図

付論 2

法勝寺遺跡出土の古瓦について

佐藤　宗男

近江町高溝に所在する法勝寺遺跡は、従来発見された遺物より白鳳時代の寺院址として注目されて来たものである。然るに、その遺跡の規模、遺構等については、昭和51年に一部が調査されたに過ぎず、遺跡の全体の把握がなされていない。又、現地には、礎石と思われる巨石も数ヶ所に所在するが、原位置に所在するものか移動せるものかも不明である。出土遺物の主体をなす古瓦については、地元在住の粕渕辰次翁の積年の努力によって数多く収集保管されている。又、近年調査された本遺跡の西方に所在する狐塚遺跡においても、これを補足する古瓦が出土している。

ここに、同翁の所蔵にかかる古瓦を中心として、その年代、特徴等について考察を進める。

軒　丸　瓦

1　善正寺系軒丸瓦（図－1・2）

この文様を有する瓦については、近畿地方においても殆ど例がない。唯、大阪府羽曳野市埴生野に所在する善正寺址出土のものが、一種類あるに過ぎない。この文様は、百済の末期様式の中にあり、泗沘（しひ）時代の故地たる扶余の東南里廃寺など数ヶ寺より出土しているに過ぎない。これより、彼地との直接的な関連をうかがわせるものがあるが、ここにおいては、同型式の地方への伝播と考えるのが至当である。

本瓦と善正寺瓦とを比較するに、全体的な構成は類似しているが、細部にわたって見る時は、少しづつ差異が認められる。先づ外区については、本瓦については、現在欠落しており如何なる構成であったかは不明である。善正寺瓦の場合は重弧文を配している。花弁については、善正寺瓦の場合は、幅が広く重厚なる感を与えているが、本瓦の場合幅は狭く繊細な感が持たれる。これは中房の直径とも関連している。又、花弁の中の子葉の外側には、本瓦にあっては、細い稜線を持っているが、善正寺瓦においては、これを欠いている。弁間については、善正寺瓦の場合、子葉を以って充たされているが、本瓦の場合はこれがなく、珠文が所在している。中房については、蓮子の数が両例とも１＋８を数えるが善正寺瓦の場合には、蓮子の周囲に周環を有しているが、本瓦については、これを有しない。

年代的な考え方については、これ２点のみでは判然としないが、次に述べる山田寺式の瓦との関係もあり、相互の相関年代も不明である。或は平行するか、若干先行するかは現在のところ不明である。

2　山田寺式軒丸瓦（図－3・4）

山田寺は、その創建より完成に至るまでには40年余りを費しており、瓦の様式としても、所謂山田寺式の範囲に入るものの詳細なる年代観は、不明な部分が多い。しかし、近年の調査の進展に伴い、創建時のものとそれ以降のものとの区分が明確になされつつある。

本遺跡出土の山田寺式の瓦については、文様の構成より、２種類が認められる。３の瓦については、中央の稜が短く、端は角張っており、次の４の瓦に先行するものと思われる。外区の文様については、山田寺の場合には、重弧文が付けられているが、本例においては付けられて

いない。中房については、これを欠くために、如何なる状態であったかは不明である。4の瓦については、弁端が丸みを帯びており、全体に平板的な感じを受ける。中房は小さく、蓮子は、1＋6となっており、外区の文様はない。なお3の瓦については、米原町枝折の三大寺遺跡および長浜市大東町の大東遺跡より類似した瓦が発見されている。

3　川原寺式軒丸瓦（図－5・6・7）

盛唐の様式を直輸入したこの文様は、川原寺の創建に使用せられ、以後の軒丸瓦の文様の規範となって行くものである。本遺跡出土の軒丸瓦のうちこれに属するものは、三種類が確認されているが、何れも小片に過ぎず、全体像が推定されるのは、一片に過ぎない。5は中房の大部分と蓮弁の一部であるが、弁の様相は判然としない。蓮子の数は磨滅のため不明であるが、大略1＋8＋8＋12であると思われる。しかし、この5の瓦片が年代的に最も本来の川原寺の様式に近いものと思われる。次の6の軒丸瓦については、中房の約半分と蓮弁の一部があるが、これも磨滅甚だしく蓮弁の構成も不明である。蓮子の数も明確でない。7の軒丸瓦については、全体像が類推出来るが、范（はん）がづれており、蓮弁の様相も単弁であるか、複弁であるか推定出来ない。蓮子は1＋10かとも思われる。外区は僅かに面違（めんたが）いの鋸歯文が判読される。年代については、先の5に続いて6と受継がれ7に至ると思われるが、明確な点を欠くうらみがある。

4　未詳型式軒丸瓦（図－8）

この軒丸瓦については、その文様の構成より未だ他に類例を見ない型式である。文様の構成は、外区は無文であり、蓮弁は単弁八葉となっており、中房は構成されていない。蓮子は1＋4を有している。この様式は他に類型が見られず、今後の研究、類例の出土を待つものである。時期としては、様式より平安時代に入るものと思われる。

軒　平　瓦

前述の軒丸瓦に相対する軒平瓦については、現在のところ、3種類が確認されている。即ち3重弧文9と4重弧文10および扁行木葉文11・12とも考えられる3種類である。このうち4重弧文については、他の類例より山田寺式の軒丸瓦に対応し、3重弧文については、川原寺式の軒丸瓦に付随するものと思われる。最後の扁行木葉文とも名付けられる軒丸瓦については、他にその例がなく、唯上記の未詳型式の軒丸瓦に対するものと考えられる。この軒平瓦については、現存部において別個体として左右半分づつが出土しているが、全体像をうかがい知ることが出来る。外区は無文であって、内区には、木葉状の装飾文が綾杉状に配列されている。

以上、法勝寺址出土の古瓦について、その概要を述べたが、これらの遺物より考えて、法勝寺の存立年代は、大略7世紀後半より9世紀又は10世紀前後まで在存していたことをうかがわせるものである。

本遺跡については、未だ全面的な調査が行なわれていなく、寺域の決定、堂塔の配置の確認等は全く不明のままである。現地には土壇らしきものや、移動はしているが礎石も残されており、寺域の調査を全面的に行えば、湖北地方としては、唯一の寺域の確認された寺院址となる可能性も十分にある。最近の開発の波も本遺跡付近まで及んできており、早急なる学術的な調査と、遺跡の保存を切に望むものである。

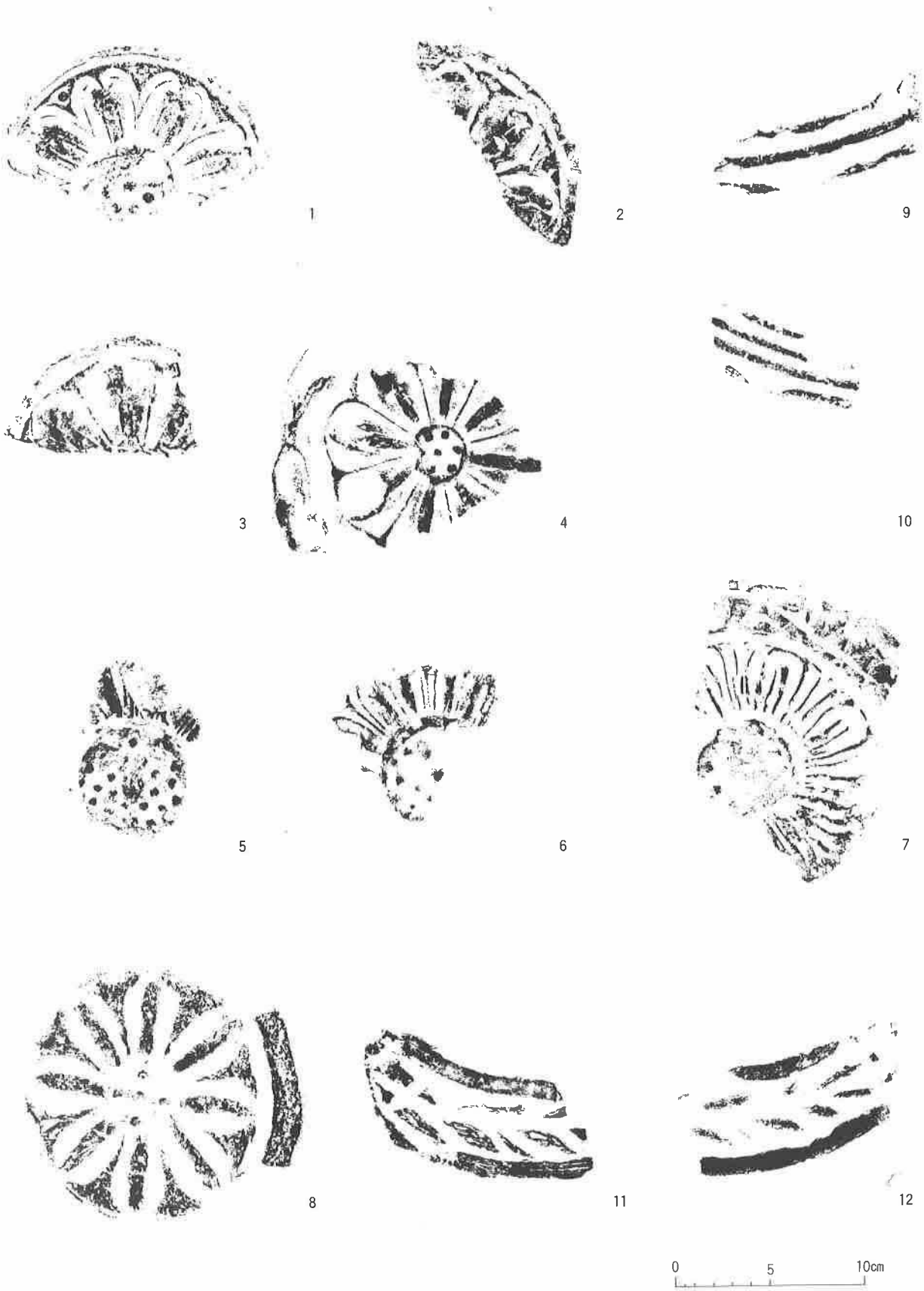


plate　法勝寺遺跡出土瓦拓本

能登瀬遺跡採取鉄滓の金属学的調査

大澤正己

1　概　　要

能登瀬遺跡から採取された椀形状鉄滓の鉱物組成と化学組成を調査して次のことが明らかになった。

〈1〉　鉄滓は、まだ不純物を多く含有した鉄塊の成分調整のための再加熱時に排出された精錬鍛冶滓（大鍛冶滓）に分類される。一次製錬の夾雑鉱物を含む鉄塊は、そのままでは靱(じん)性の優れた鉄器製作は出来にくいので、成分調整の中間工程を必要とする。この時点で生成された鉄滓で鍛冶炉の凹部に堆積したので椀形状を呈している。

〈2〉　鉱物組成はヴスタイト（Wüstite；FeO）＋フエアライト（Fayalite；$2FeO \cdot SiO_2$）で構成され、鍛冶滓特有の晶癖を示す。

〈3〉　化学組成は全鉄分（Total Fe）が47％含有され、このうち酸化第１鉄（FeO）が45％に対して酸化第２鉄（Fe_2O_3）が17.25％を占める。これに対して造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO）が33.26％と高目である。

また二酸化チタン（TiO_2）0.72％、バナジウム（V）0.011％をはじめとして、他の随伴微量元素も酸化マンガン（MnO）0.32％、五酸化燐（P_2O_5）0.49％、硫黄（S）0.088％と高目で精錬鍛冶滓としての成分構成である。鉄素材の原料は、鉱石系と考えられるが砂鉄系を全面否定するまでの量でもない。今後の研究課題となろう。

2　いきさつ

今回の調査鉄滓は、滋賀県坂田郡近江町能登瀬に所在する山津照神社古墳の丘陵尾根先端の西斜面[註1]から、近江町教育委員会により採取された。当古墳からは、明治時代の発掘で鉄刀や内行花文鏡・馬具・埴輪・王冠・土器等が検出されている。また、昭和18～19年にかけて樋口清之氏の踏査により弥生式土器片や土師器片に伴う鉄滓出土地である能登瀬遺跡の可能性をもつ場所でもある[註2]。以上の様に、調査鉄滓は由緒ある土地からの採取品であり、推定年代は今一歩決め手を欠くものの、かなり遡ると考えられる。この鉄滓の調査依頼を近江町教育委員会より要請されたので、金属学的調査結果と共に、滋賀県下出土の鉱石製錬滓や福井県下出土の砂鉄製錬滓らとの組成比較を試みておく。

3　調査方法

3－1　供試材

調査鉄滓は既述した様に表面採取品である。大きさは、80×65×40㎜の椀形状鉄滓であり、重量は155gあった。

3－2　調査方法

(1)　顕微鏡組織

鉄滓は水道水で充分に洗滌して乾燥後、２分割して片方の中核部を検鏡試料とした。（残余分は分析試料とする）検鏡試料はベークライト樹脂に埋込んだ後、エメリー研磨紙（コランダム：Al_2O_3に磁鉄鉱を含んだ黒灰色の粉末砥粒を膠(にかわ)質の接着剤で塗布している）の#150、#320、#600、#1,000を使って荒研磨し、次にアルミナ（Al_2O_3）粉末水溶液（アルミニウム塩の沈澱物を焼成して作られた六方晶形細粒粉末の水溶懸濁液）をバフ布に注ぎながら被検面を鏡面に仕

上げて構成鉱物の同定を行なった。

(2) 化学組成

鉄滓の分析は、検鏡試料の片割れの中核部を粉末化して次の方法で行なっている。

重クロム酸使用の重量法……酸化第1鉄(FeO)、二酸化珪素(SiO_2)

赤外吸収法……炭素(C)、硫黄(S)

原子吸光法……全鉄分(Total Fe)、酸化アルミニウム(Al_2O_3)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、二酸化チタン(TiO_2)、酸化クロム(Cr_2O_3)、バナジウム(V)、銅(Cu)

中和滴定法……五酸化燐(P_2O_5)

4 調査結果

肉眼観察： 表皮は端部の一部に黒色なめらか部分もあるが、その大部分は赤褐色を呈してわずかな凹凸に気泡を露出し、木炭痕を残す。裏面は黒褐色で滴下状凹凸と木炭痕を残し、粗鬆(そほう)さを有している。破面は赤黒色でコークス状の気泡を発するが、全体的には緻密質である。鍛冶炉の炉底に堆積した椀形滓に分類できる。

顕微鏡組織： Photo 2の最上段に示す。鉱物組成は、白色粒状に成長したヴスタイト(Wüstite：FeO)と、灰色長柱状のフェアライト(Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$)、それに基地の暗黒色のガラス質スラグから構成されている。

鉄(Fe)―珪素(Si)系酸化物主体の鉱物組成であり、鍛冶滓特有の晶癖となっている。

化学組成：全鉄分(Total Fe)が高目で47%を示し、このうち酸化第1鉄(FeO)が45%で、残りは酸化第2鉄(Fe_2O_3)が17.21%である。次に造滓成分($SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$)が33.26%と鍛冶滓としては高目である。ただし造滓成分のうち$CaO/Al_2O_3 \fallingdotseq 0.39$、$CaO/SiO_2 \fallingdotseq 0.15$らの比で分る様に、特別溶剤(鉄と滓の分離をよくするための添加物)の添加はなされていない

随伴微量元素のうち、二酸化チタン(TiO_2)やバナジウム(V)らは高目である。前者で0.72%、後者で0.011%となっている。二酸化チタン(TiO_2)は砂鉄系原料から検出される元素であって、鉱石系は比較的に微量値である。該材の0.73%は、やや高目傾向にあり、砂鉄系の可能性も考慮に入れる必要がありそうである。他は、酸化マンガン(MnO) 0.32%、硫黄(S) 0.088%、五酸化燐(P_2O_5) 0.49%らは高目であり、低含有元素としては酸化クロム(Cr_2O_3)、銅(Cu)らがNil である。これら構成元素からみても精錬鍛冶滓(大鍛冶滓)に分類できる。

5 考　察

―能登瀬遺跡出土鉄滓の位置づけ、鍛冶滓と製錬滓の相違点―

鉄生産の工程は次の順序で行なわれている。(i)製錬、(ii)精錬鍛冶(大鍛冶)、(iii)鍛錬鍛冶(小鍛冶)、(iv)鉄製品。能登瀬遺跡から採取された鉄滓は、(ii)の精錬鍛冶滓(大鍛冶滓)である。そうすると、その前後の(i)製錬滓と、(iii)鍛錬鍛冶滓(小鍛冶滓)らの鉱物組成と化学組成には、どんな特徴があるのであろうか。滋賀県下及び福井県で検出された鉄滓を参考比較試料として概略を述べてみる。

滋賀県下では、現在のところ、(i)製錬は、鉱石(磁鉄鉱)を木炭でもって還元した時に排出される滓である鉱石製錬滓のみが検出されて、砂鉄製錬滓は未検出である。鉱石製錬滓の鉱物組成は、PhotO 2の伊香郡の古橋製鉄遺跡[註3]と、大津市の源内峠遺跡出土鉄滓で示すように、フェアライト(Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$)主体で、これに微小結晶のマグネタイト(Magnetite：

Table 1. 鉄滓及び鉱石の化学組成

符号	遺跡名	所在地(出土位置)	試料分類	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化硅素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)
A－851	能登瀬	坂田郡近江町能登瀬	精錬鍛冶滓	?	47.0	45.0	17.21	20.66	7.94	3.08
S－71	七りん館	東浅井郡浅井町鍛冶屋	鍛錬鍛冶滓	近世?	55.97	46.42	28.43	17.1	4.03	Trace
W－91	野路小野山	草津市野路町1号炉下	鉱石製錬滓	7C未～8C初	38.33	44.57	5.05	33.25	7.60	3.85
W－92	〃	〃 〃	〃	〃	45.80	51.11	7.49	28.75	5.83	2.19
X－91	〃	〃 2号炉(上層)	〃	〃	45.24	44.35	13.76	27.00	6.12	1.82
X－92	〃	〃 〃	〃	〃	46.36	53.68	5.19	27.55	5.99	2.03
Y－91	〃	〃 SX－2	〃	〃	12.99	12.42	4.49	58.50	9.52	1.70
Y－92	〃	〃 〃	〃	〃	42.86	48.24	7.49	30.45	6.05	2.64
Z－91	〃	〃 SD－2	鉱石	〃	69.93	26.15	70.60	0.25	1.06	Trace
T－71	北牧野	高島郡牧野町表採	鉱石製錬滓	8C	35.04	41.93	15.91	24.06	6.97	3.76
T－76	〃	〃 〃	〃	〃	42.42	48.57	6.55	25.4	5.13	2.2
8M－811	平津	大津市平津町 SOHT2	鉱石製錬滓	平安・鎌倉	40.3	43.3	9.50	33.3	5.48	4.69
8M－812	〃	〃 SOH排土	鉱石	〃	67.7	25.43	68.5	2.70	0.71	1.54
R－7	源内峠	大津市瀬田南大萱	鉱石製錬滓	7C未～8C	13.97	6.28	12.68	54.50	2.45	Trace
J－841	笹岡第1跡	福井県金津町	砂鉄製錬滓	不明	26.6	19.25	16.68	24.76	6.50	0.16
M－841A	笹岡大久保山	〃	〃	〃	27.4	14.51	23.02	23.42	7.09	3.15
N－841	滝上西谷 (細呂木駅前)	〃	〃	〃	30.1	36.5	2.53	31.1	7.51	1.82
O－841	滝鴻巣山	〃	水酸化鉄	〃	17.63	0.43	24.73	56.0	8.46	0.89
P－841	沢松木谷	〃	砂鉄製錬滓	〃	33.6	41.2	2.25	25.6	7.37	1.82
Q－841	熊坂椎堂	〃	〃	〃	17.50	9.77	14.16	36.0	9.26	5.04

酸化マグネシウム (MgO)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe	注
1.58	0.32	0.72	Nil	0.088	0.49	0.39	0.011	Nil	33.26	0.708	0.015	1
0.79	0.1	0.11	0.020	0.059	0.98	—	0.019	0.005	21.92	0.372	0.002	2
1.06	0.58	0.81	0.02	0.026	0.14	—	<0.01	<0.01	45.76	1.194	0.021	3
0.91	0.47	0.59	0.015	0.028	0.13	—	<0.01	<0.01	37.68	0.823	0.031	〃
0.79	0.39	0.65	0.008	0.038	0.10	—	<0.01	<0.01	35.73	0.790	0.014	〃
0.79	0.45	0.65	0.009	0.024	0.10	—	<0.01	<0.01	36.36	0.784	0.014	〃
0.64	0.23	0.76	0.019	0.026	0.10	—	<0.01	<0.01	70.36	5.416	0.059	〃
0.73	0.47	0.69	0.006	0.026	0.10	—	<0.01	<0.01	39.87	0.930	0.016	〃
0.32	0.18	0.68	0.31	0.010	0.048	0.28	0.02	0.03	—	—	—	〃
2.74	0.39	0.61	Trace	0.019	(P) 0.91	0.19	0.01	0.01	37.53	1.071	0.017	4
1.28	2.8	0.22	0.022	0.029	0.39	—	0.036	0.005	34.01	0.802	0.005	〃
1.72	0.34	0.29	Nil	0.036	0.20	0.11	0.006	0.005	45.19	1.121	0.007	5
0.31	0.17	0.046	Nil	0.019	0.12	0.07	Nil	0.007	5.20	0.077	0.001	〃
0.38	0.1	0.46	0.05	0.010	0.41	0.32	0.02	0.001	57.33	4.104	0.033	6
3.07	0.81	14.41	0.17	0.024	0.084	0.21	0.26	0.004	34.49	1.297	0.542	7
2.87	0.83	19.81	0.24	0.046	0.14	0.67	0.028	0.004	36.53	1.333	0.723	〃
3.28	0.67	11.18	0.10	0.036	0.17	0.27	0.20	0.004	43.71	1.452	0.371	〃
0.33	0.058	0.18	0.015	0.041	0.016	0.40	Nil	0.004	65.68	3.726	0.010	〃
2.49	0.67	16.97	0.12	0.035	0.14	0.11	0.25	0.004	37.28	1.110	0.505	〃
2.49	0.67	15.68	0.17	0.036	0.14	1.63	0.15	0.004	52.79	3.017	0.896	〃

(註)

1. 大澤正己「能登瀬遺跡採取鉄滓の金属学的調査」 本報告
2～6. 大澤正己「野路小野山遺跡出土の製鉄関係遺物調査」『野路小野山遺跡発掘調査概報』滋賀県教育委員会、草津市教育委員会 1984
7. 大澤正己「福井県金津町所在古代製鉄関連遺物の金属学的調査」 金津町教育委員会 1986. 10. 2

Table. 2　滋賀県下（福井県含む）出土鉄滓の分類

鉄滓 ＼ 組成		製錬滓		精錬鍛冶滓（能登瀬）	鍛錬鍛冶滓（七りん館）
		鉱石系（滋賀県下）	砂鉄系（福井県）		
鉱物組成		F＋（M）（W）	M＋F I＋U I	W＋F	W＋F
化学組成	全鉄分（Total Fe）	38～46％	17～34％	47％	56％
	造滓成分	36～40％	35～52％	33％	22％
	二酸化チタン（TiO_2）	0.65～0.81％	11～20％	0.72％	0.11％
	バナジウム（V）	＜0.01％	0.15～0.26％	0.011％	0.019％

F：Fayalite（$2FeO \cdot SiO_2$），M：Magnetife（Fe_3O_4），W：Wüstite（FeO），
I：Ilmenite（$FeO \cdot TiO_2$），　U：Ulvospinel（$2FeO \cdot TiO_2$），

Photo 1　能登瀬遺跡全景（南西から）

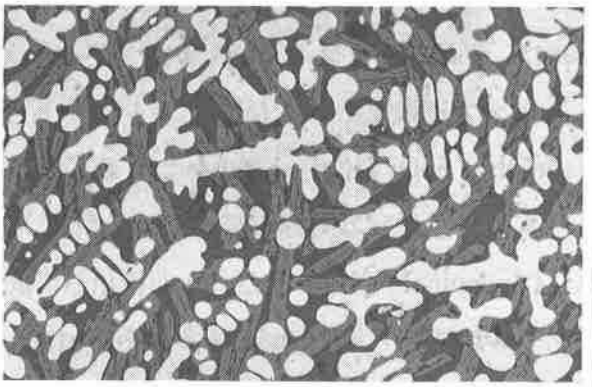
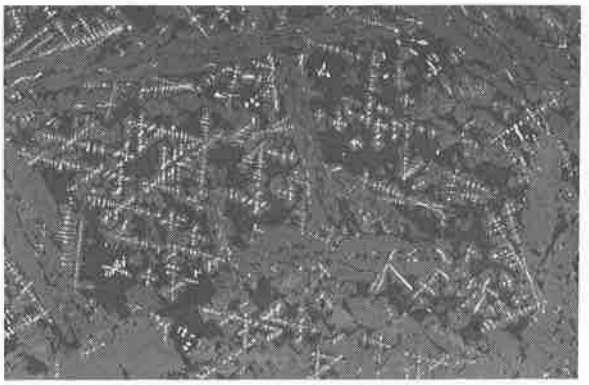
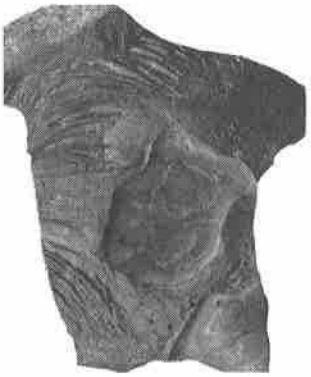
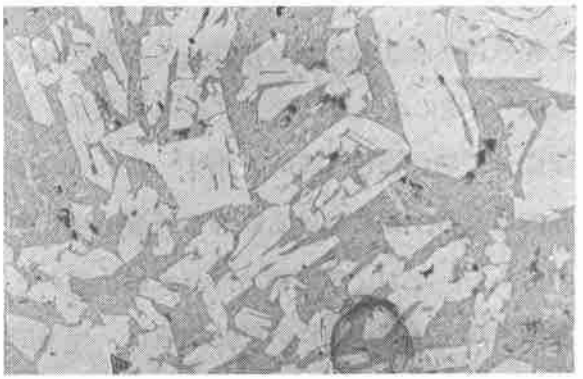
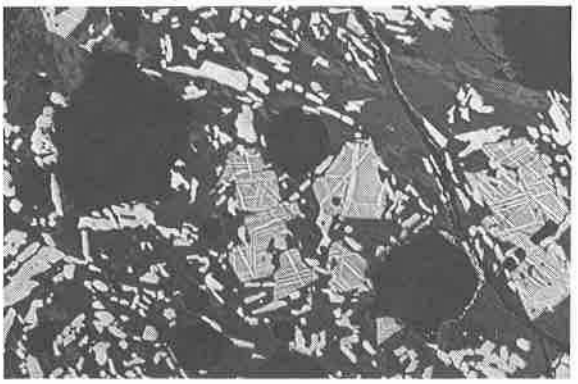
（1） A－851 能登瀬遺跡 （表面採取） 精錬鍛冶滓×100 外観写真 ⅓		
（2） K－851 古橋遺跡 （製鉄炉周辺） 鉱石製錬滓×100 外観写真 ⅓		
（3） L－852 源内峠遺跡 （昭和60年度調査） 鉱石製錬滓×100 外観写真 ⅓		
（4） J－841 笹岡遺跡 （福井県金津町） 砂鉄製錬滓×100 外観写真 ⅓		

Photo 2　鉄滓の顕微鏡組織

Fe_3O_4）もしくはヴスタイト（Wüstite：FeO）が晶出する。これに対して砂鉄系製錬滓であれば、二酸化チタン（TiO_2）が含有される為、高チタン砂鉄原料であればイルミナイト（Ilmenite：$FeO \cdot TiO_2$）→Photo 2の最下段組織写真の白色短片状結晶参照やウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$）らが析出し、低チタン砂鉄原料であればマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）が認められる。砂鉄製錬滓の鉱物組成の一例としてPhoto 2に福井県金津町所在の笹岡遺跡製錬滓を示している。イルミナイトと、未還元砂鉄粒子の格子状組織（チタン鉄鉱で代表的なウィドマンステッテン：Widmannstätten構成）が主なる鉱物である。

化学組成は、Table 1のデータをまとめてその特徴をTable 2に示す。製錬滓は脈石からくる夾雑物が多いが、精錬鍛冶滓（大鍛冶滓）→能登瀬鉄滓から鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）→七りん館鉄滓へと工程が進むに従って夾雑物は漸次低減し、逆に全鉄分は増加する。（夾雑物とは造滓成分や随伴微量元素らを指す）。これらの成分動向は、各工程における鉄滓の特質を現わすものである。なお、精錬鍛冶滓（大鍛冶滓）と鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）の鉱物組成は、標準的にはヴスタイト＋フェアライトで大差ないが、稀には精錬鍛冶滓にヴスタイト＋マグネタイト＋フェアライトの混在組織も認められる。

以上の観点にたてば、能登瀬遺跡出土鉄滓は、精錬鍛冶滓（大鍛冶滓）に位置ずけられる。ただし、この時の精錬鍛冶に供した鉄塊は、鉱石系か砂鉄系かのその判定は微妙である。現在のところ滋賀県下では、砂鉄製錬滓は未検出で、鉱石製錬滓が主体である。しかし、能登瀬遺跡採取鉄滓は精錬鍛冶滓に分類されるが、二酸化チタン（TiO_2）が0.72%とやや高目含有で、砂鉄系にとってもおかしくない数値である。炉材粘土らに起因するチタン分か、砂鉄系鉄塊が今後の研究課題になってくる。

最後に樋口清之氏の問題とした製鉄原料中のマンガン（Mn）含有量にふれておく。Table 1に鉱石系と砂鉄系の製錬滓の成分値を記載している様に、両者ともに小数1桁目の含有量であり、鍛冶滓になるとその値は小さくなる。製錬滓と鍛冶滓の相違、また地域差が大きく影響するので[註4]、マンガン含有量のみで鉱石か砂鉄かの分類判定は危険である。福岡県の糸島半島賦存（ふぞん）の砂鉄は、列島内でも特有の低チタン系成分であり、この種の製錬鉄塊を鍛冶した場合は、二酸化チタンはほとんど残留せず鉱石系と間違えやすい。福岡県早良（さわら）郡壱岐村及び糸島郡芥屋（けや）村新町裏畑出土鉄滓[註5]は、砂鉄系鍛冶滓とみるべきであろう。

註

1　Photo 1

2　樋口清之「古代湖北の鉄文化」『歴史』第9号　滋賀県立長浜北高等学校歴史部　1961

3　伊香郡木之本町古橋所在の製鉄遺跡、6世紀後半～7世紀初頭に比定される。これまでの発掘例としては古い事例に属する。古橋遺跡の発見により、列島内では鉱石製錬と砂鉄製錬がほぼ同時期に並ぶ様相を呈している。

古橋遺跡出土の調査鉄滓は、S．60．4．19に発掘担当者の丸山竜平氏に現地において提供して頂いたものである。

4　大澤正巳「古墳出土鉄滓からみた古代製鉄」『日本製鉄史論』たたら研究会編　1983　第6表の古墳出土鉄滓の化学分析結果参照。岡山県津山市の鉄滓は、砂鉄・鉱石両系においてもMnOとして2.5～4.07%を含有する。

5　樋口清之氏前掲書2。俵国一氏文献引用鉄滓。

図　版

図版一　近江町遠景

東部（岩脇山より）

西部（日撫山より）

図版二　分布調査風景

表面採集

遺物整理

図版三　醒井神籠石様列石

遠景（西より）

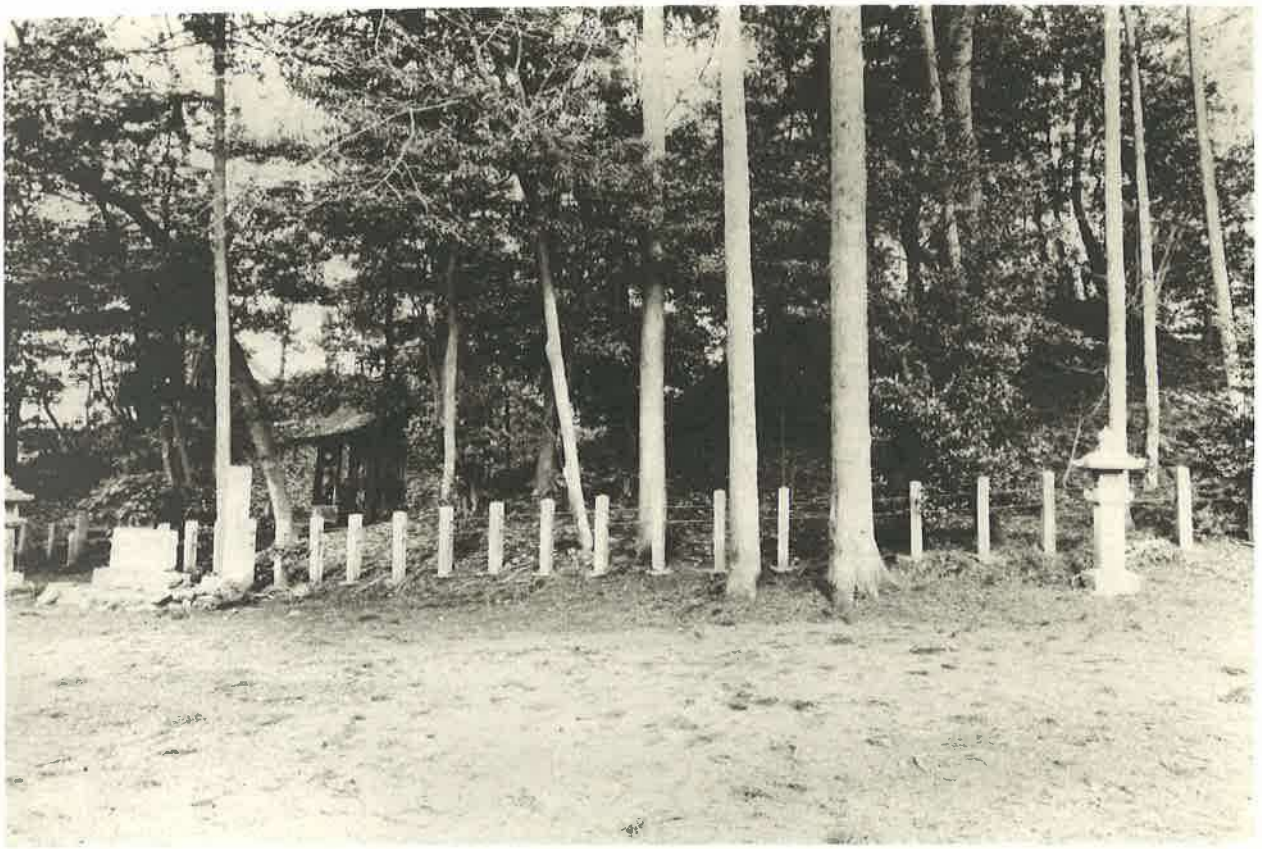
南峰（東より）

図版四　醒井神籠石様列石

中峰南部（南西隅より）

中峰南部南東隅石積

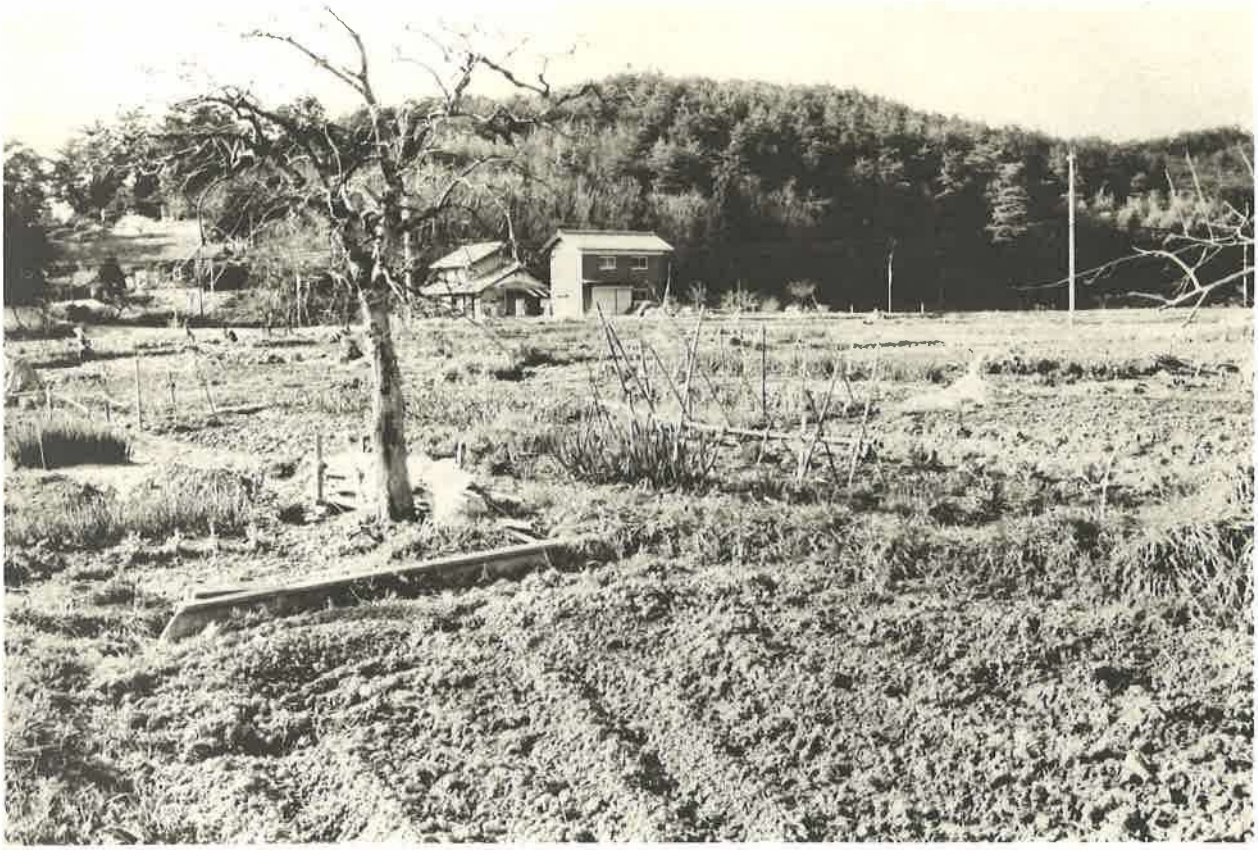
図版五　山津照神社古墳・奥深古墳群



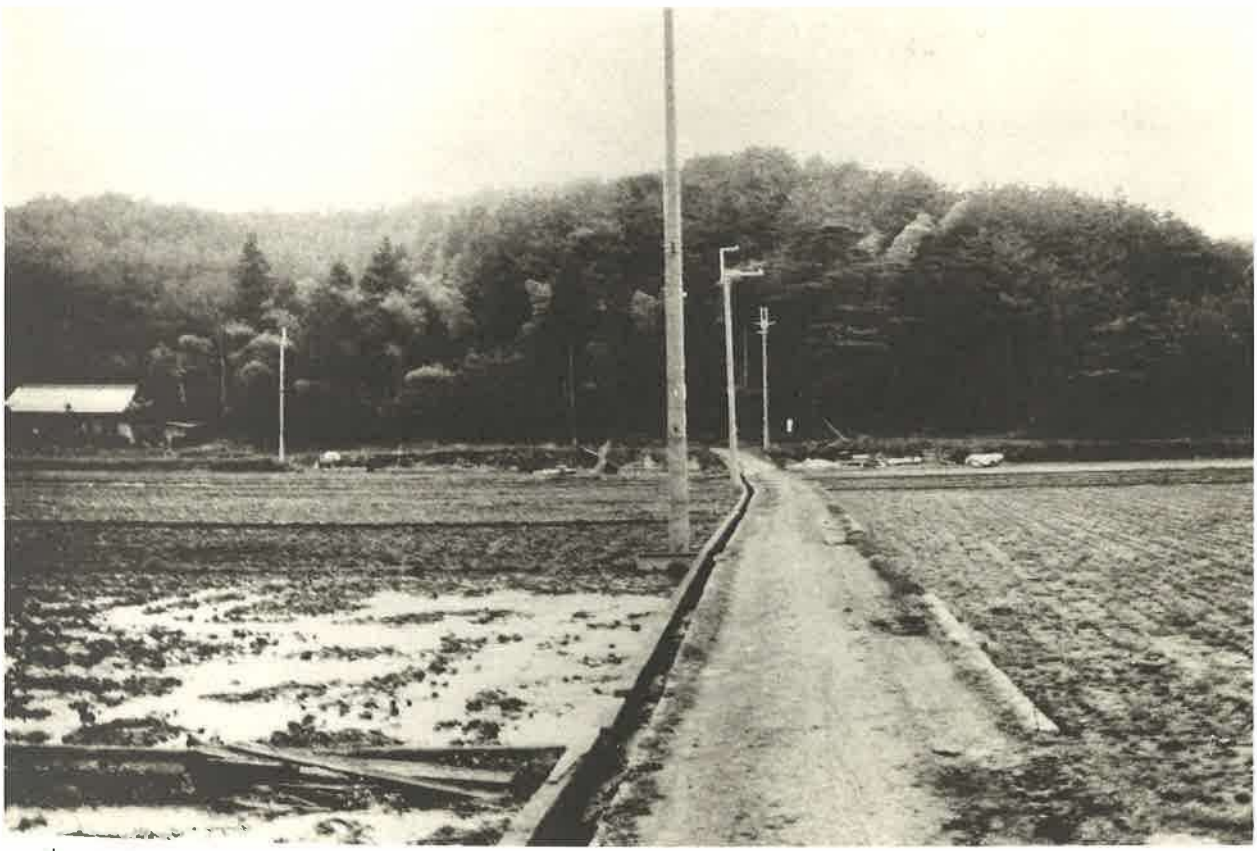
山津照神社古墳（東より）

奥深古墳２号墳（東より）

図版六　宮ノ前・宮ノ前北遺跡



宮ノ前遺跡（東より）



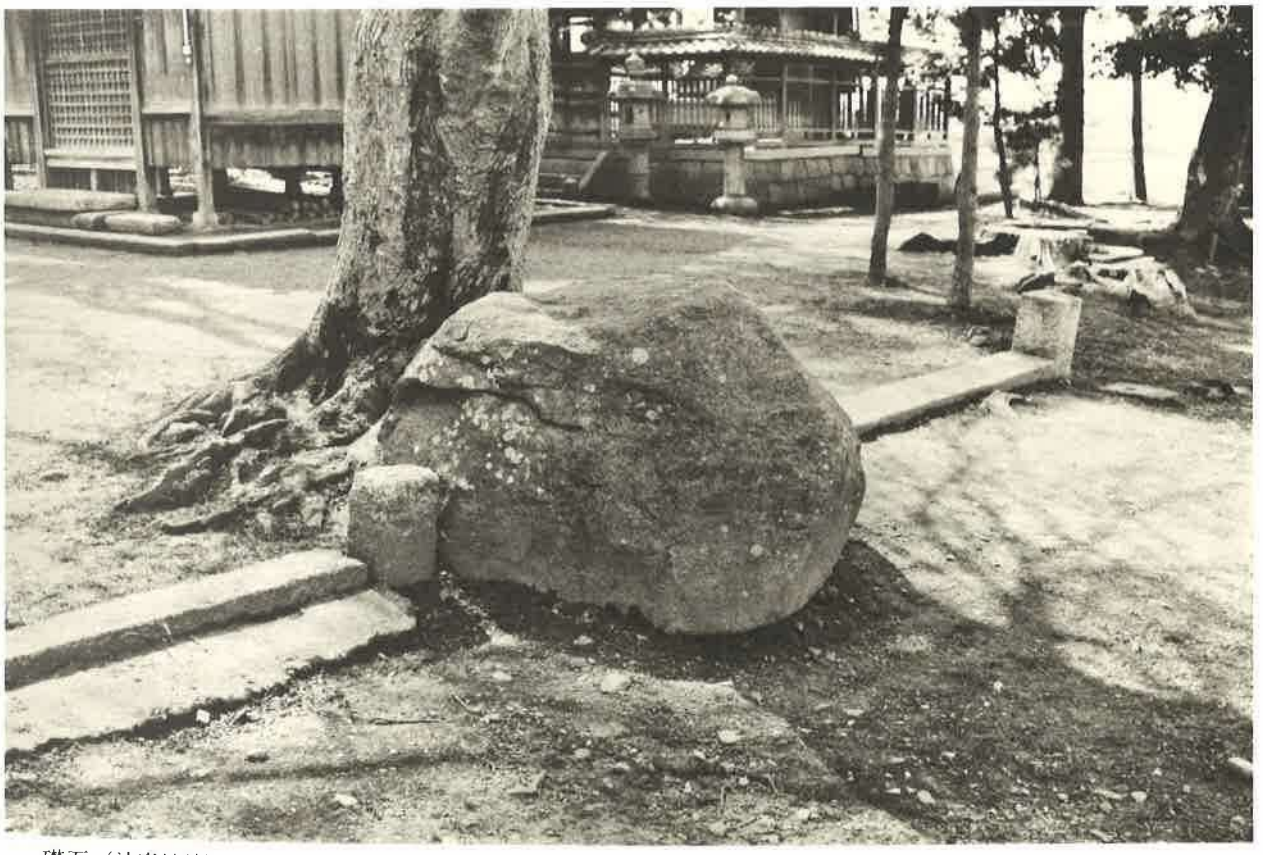
宮ノ前北遺跡（南より）

図版七　塚の越古墳・神郷・勝正寺遺跡

塚の越古墳（東より）

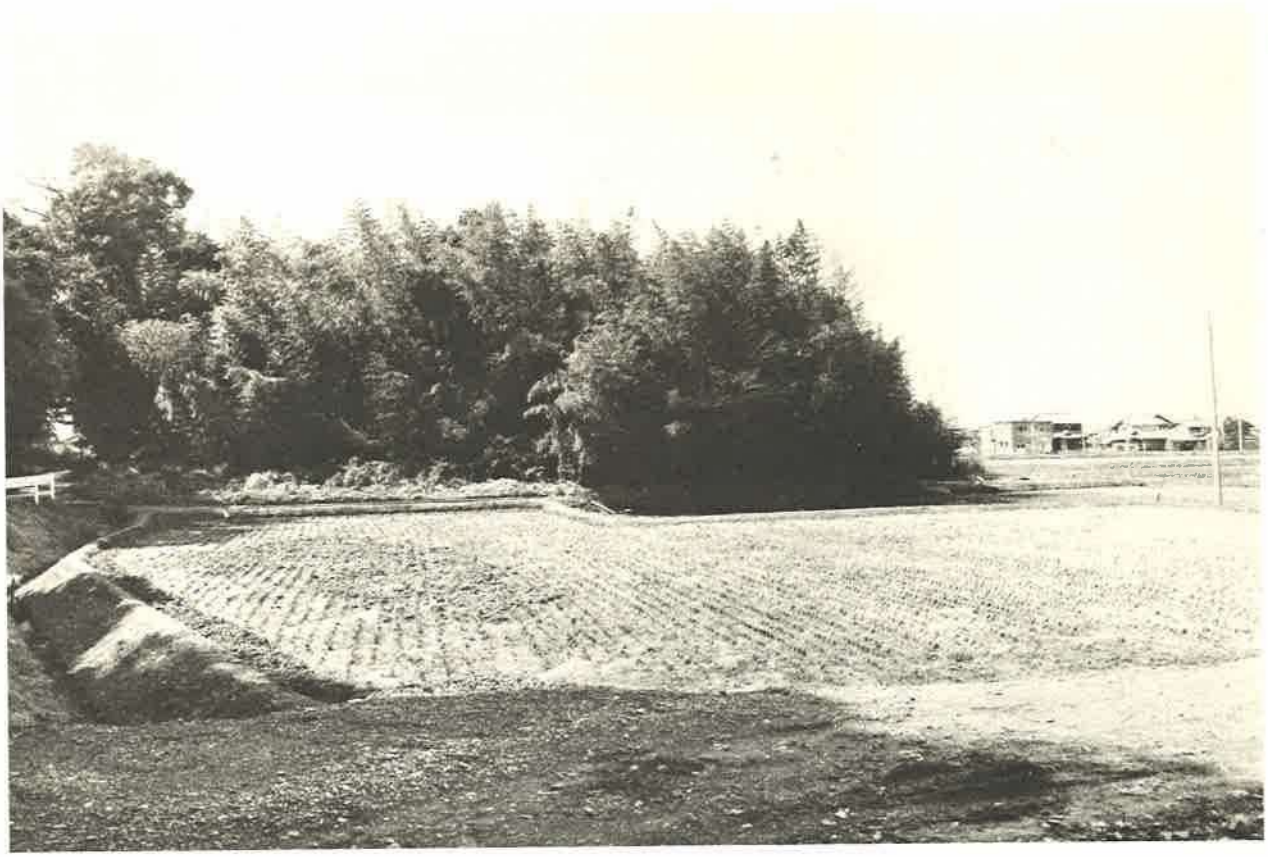
神郷・勝正寺遺跡（南西より）

法勝寺遺跡全景（南西から）

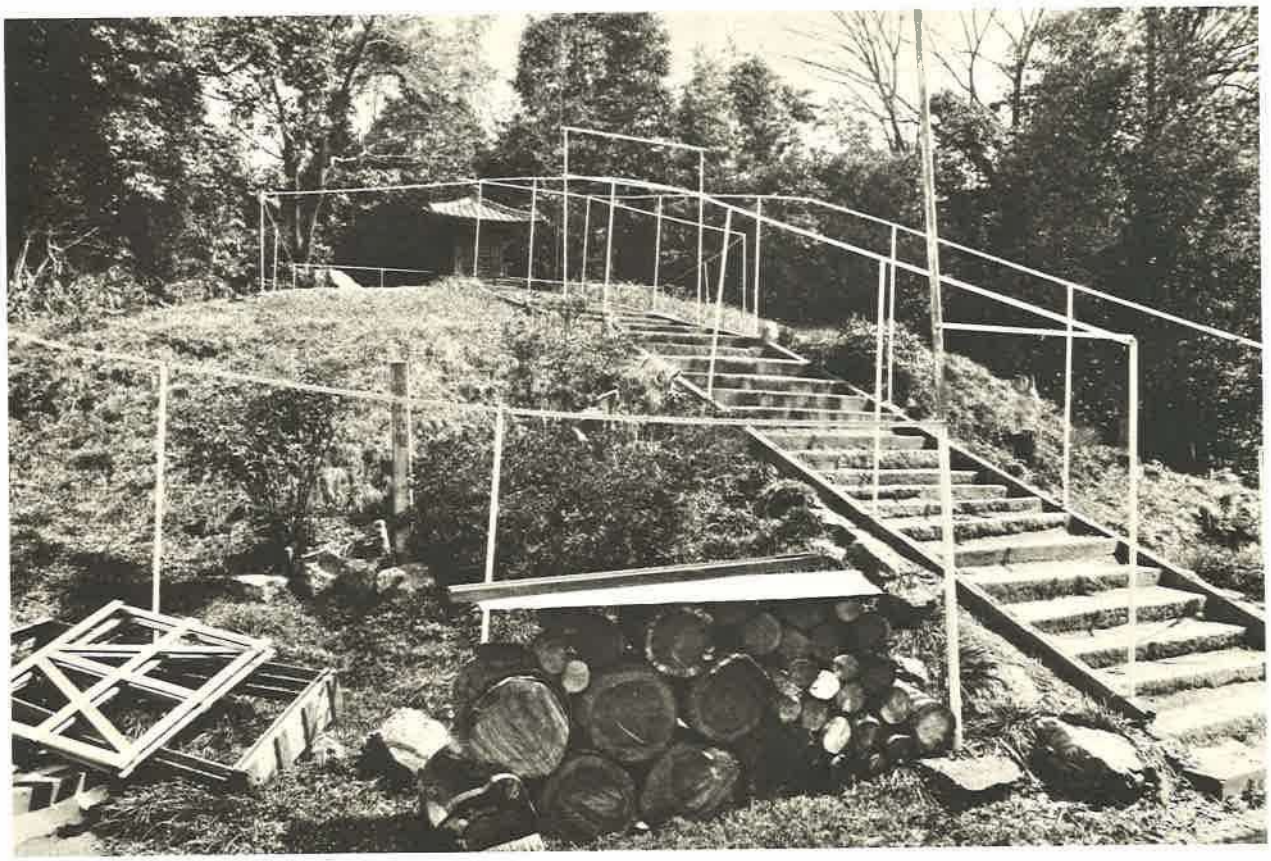


礎石（油壺神社）

図版九　人塚山古墳

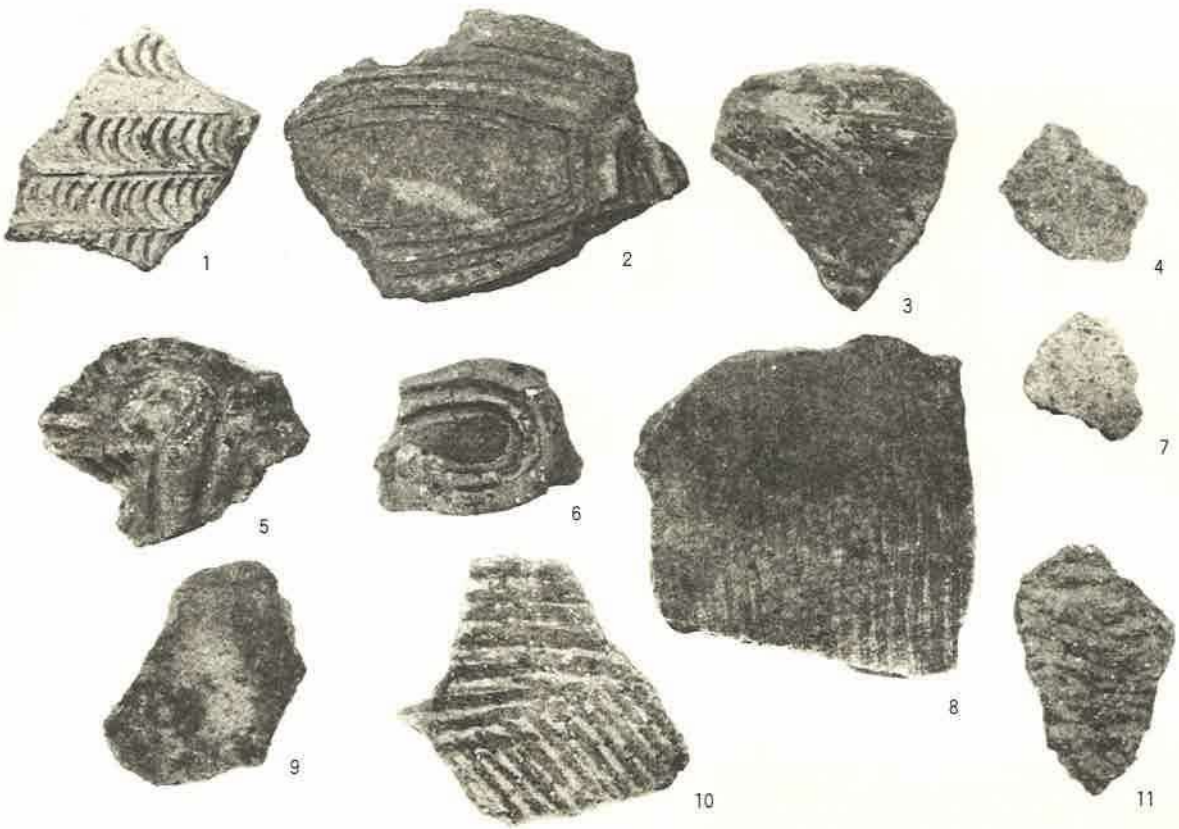


人塚山古墳（東より）



人塚山古墳（北西より）

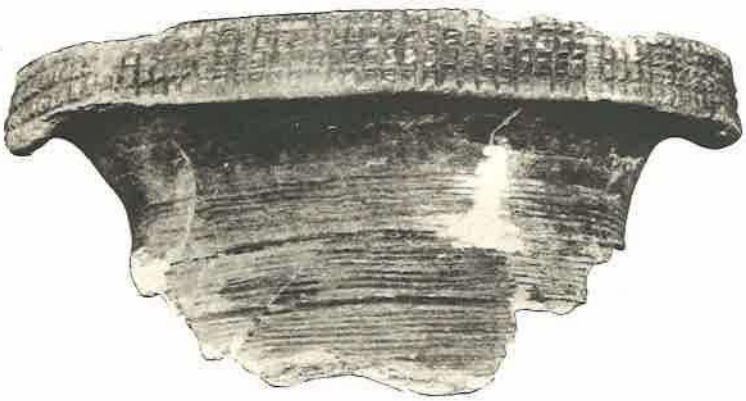
正恩寺遺跡（南東より）



法勝寺遺跡出土縄文土器

狐塚遺跡石棒（側面）

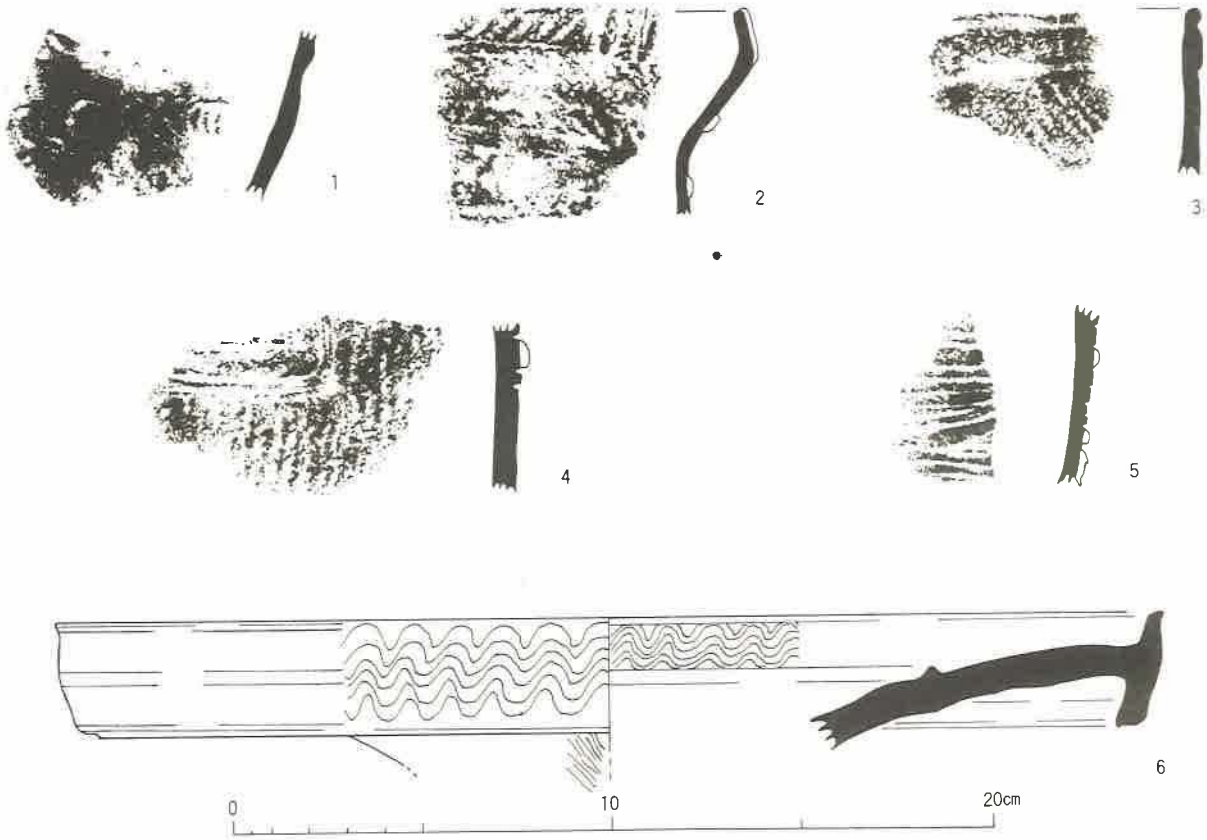
狐塚遺跡玉砥石



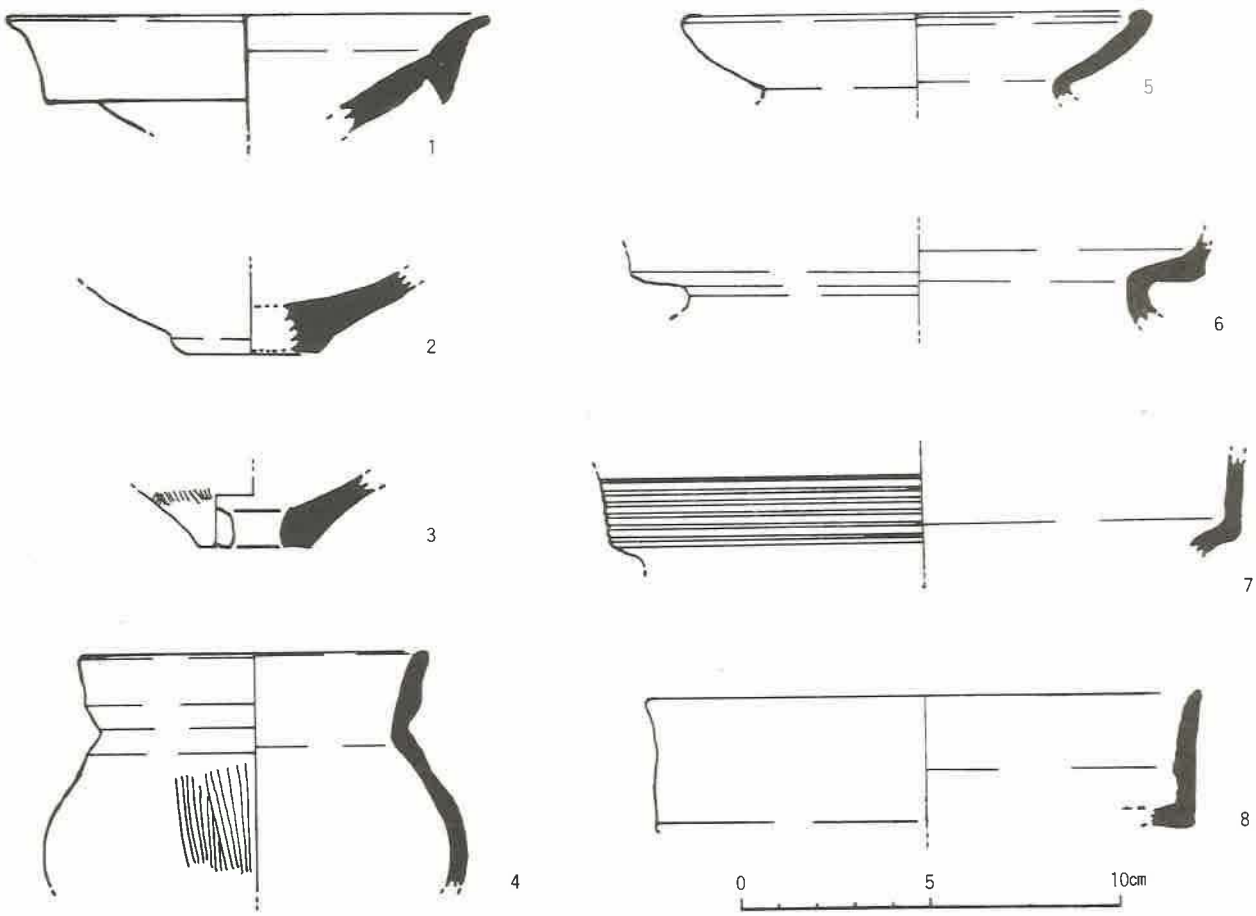
五反田遺跡弥生土器壺

安養寺遺跡石斧

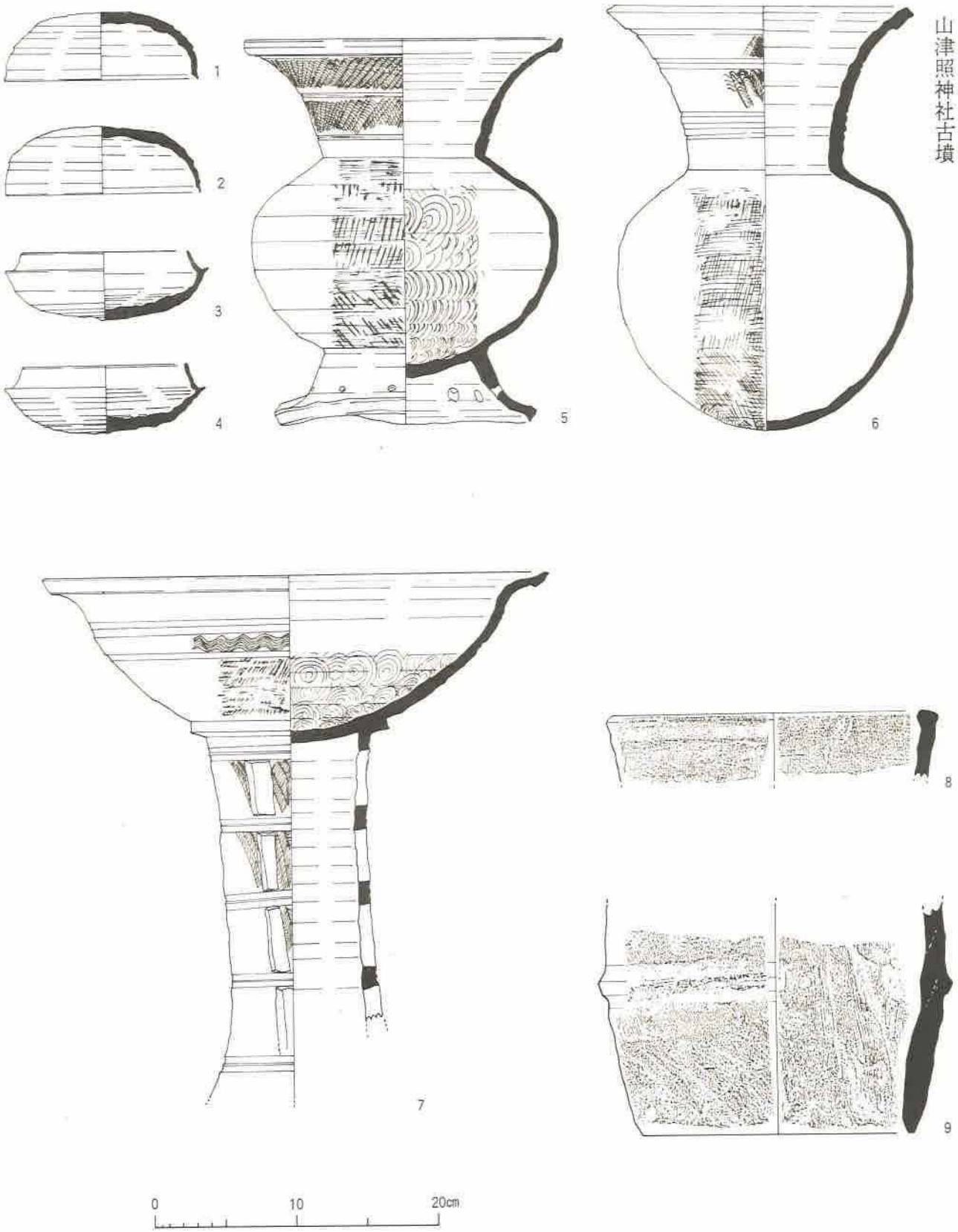
世継遺跡古式土師器甕



顔戸遺跡出土遺物実測図（1～5 縄文土器，6 弥生土器）



辻ノ前遺跡出土遺物実測図（古式土師器　1・2壺，3 甑，4 坩，5～8 甕）



出土遺物実測図（1～7　須恵器、8・9　円筒埴輪）

近江町文化財調査報告 1

近江町内遺跡分布調査報告書

昭和 62 年 3 月

編集
発行　滋賀県近江町教育委員会

印刷　有限会社　真　陽　社